



2006.11.15

ゆーごう

マーク制作:関知磨子(秋津コミュニティ:蚊帳の海一座)

(融合研のホームページ) <http://www.yu-go.info/>

(事務局)〒273-0122 千葉県佐倉市中志津7-17-4 (TEL & FAX) 043-463-1929

本号の内容

巻頭言：岸裕司副会長「融合研創立10周年記念の年に」

- 1 「第10回融合フォーラム in 東京」の記録
- 2 東北・北海道支部「仙台フォーラム」から
- 3 平成19年度以降の子ども教室への動き
- 4 資料集を送付しました
- 5 役員の承認(プログラム研究開発委員会)
- 6 10周年記念フォーラムの動き

巻頭言

「融合研創立10周年記念の年に」

融合研創立10周年記念事業委員会委員長・融合研副会長 岸 裕司

融合研は、習志野市立秋津小学校で1997年8月3日に誕生して以来、本2006年度(8月~07年7月期)が「融合研創立10周年記念」となりました。

この10年間には、「地域に開かれて信頼される学校」を目指すことを意図に市民が教職員の人事に意見が言えるようになった「コミュニティ・スクール(「学校運営協議会」制度)」の導入をはじめ、地域と学校の交流・連携・融合を図りつつ子どもたちをみんなで見守り育てる「地域子ども教室」の実施ほか、さまざまな教育改革の取り組みが行なわれるようになりました。

いっぽう、構造改革・規制緩和の名の下に、各種の特区的実施から市町村合併、地域への権限委譲、指定管理者制度の導入ほか、住民自治を基本にした「新しい地域での生き方」の模索もはじまりました。また、少子高齢化や核家族化の進行、子どもや学校をめぐるこれまでに例をみなかった悲惨な事件の続発ほかの「新しい社会問題」にも直面するようにもなりました。

そこで、融合研創立10周年記念事業委員会では、この10年間の変化を踏まえつつ創立10周年記念事業を計画しています。そして、その事業計画にあたり、以下の「3つの柱」を立てました。

1. これまでの10年間の融合研の活動と社会の変化を振り返りつつ、さらなる次への一步となるような事業を行いたい。
2. 年間テーマを「コミュニティ・スクールからスクール・コミュニティへ」としたい。
文部科学省が推進する学校運営への市民参画を主な内容とするコミュニティ・スクールの考え方から、どこの学校でも持っている 学ぶと 各種の施設機能の市民との協働・開放を通して、より高次の 校区全体を誰でもが学べる生涯学習コミュニティにする、 校区全体が安全で安心して誰でもが学び働き暮らせるノーマライゼーションの学校とまちをつくる、との考え方のスクール・コミュニティを目指したい。
3. 全国各地の「志を同じくする仲間」を増やしたい。

そして、上記の「3つの柱」のもとに、その10周年の記念として以下の2つの事業に取り組むことになりました。

- ・年度内に、全国10か所を目標に「融合フォーラム」を開催する。
- ・年度内に、「融合研創立10周年記念誌」を発行する。

- ・年度内に、全国10か所を目標に「融合フォーラム」を開催する。について
- ・全国10か所を目標にして開催する「融合フォーラム」の各名称に、「融合研創立10周年記念事業」を冠することとする。
- ・10か所には、融合研各支部研修会や融合研会員が希望する行事も含むものとする。
- ・ちなみに、先の10月14日・15日の土日に東北北海道支部が宮城県仙台市で開催のフォーラムには、「融合研創立10周年記念事業 仙台フォーラム2006 & 地域子ども教室研修会」としました。
- ・2006年12月9日(土)に開催の静岡県芝川町立芝川中学校(渡辺喜久校長・融合研副会長)での生徒のオペレッタの催しは、「融合研創立10周年記念事業 静岡2007 in 芝川オペレッタ」とします。
- ・2007年2月に神奈川支部が開催予定のフォーラムには、「融合研創立10周年記念事業 神奈川2007 in Atsugi」となる予定です。
- ・現在各支部は、東北北海道支部、神奈川支部、千葉支部(07年5月にフォーラムを開催予定)、北関東支部、大阪支部、高知支部の合計6支部あります。
- ・まだ開催が未定の支部においても、時期が確定しましたらお知らせください。
- ・島根県で開催の「第11回全国フォーラム」にも、「融合研創立10周年記念事業」を冠します。

<会員へのお願い>

- ・上記の島根県の全国フォーラムと各支部フォーラムとで「合計7か所」での「融合研創立10周年記念事業」のフォーラムとなる予定ですが、ほかに「もう2ヶ所」で「融合研創立10周年記念事業」を冠したフォーラムを開催したいと思えます。
- ・そこで、「うちの地域でも開催したい」との気持ちがある会員は、ぜひ立候補をお願いします。
「融合の普及啓発を図りたい」「融合コーディネーターを養成したい」「会員が少ない」ほか、何なりとご相談ください。
立候補がない場合は、「融合コーディネーター養成講座」を開催することも検討中です。
案としては、役員が中心に講師を担う。6回位の連続講座とする。単発参加もOKとする。などです。

- ・年度内に、「融合研創立10周年記念誌」を発行する。について。
- ・できるだけ「商業出版に耐ええる」記念誌としたいが、「載せたい内容を優先する」ことから、無理はしないこととする。
- ・読んだ人が「こういう楽しいことがやれるのだ」とわかるもの。
- ・実践・事実が平易に語られ、「よし、やってみよう!」とのやる気のきっかけがつかめるもの。
- ・研修で使えるテキストとなるような、理論も扱いたい。
- ・オムニバス型の事例集も扱い、「融合のイメージ」が具体的に得られるもの。

記念誌の内容案は、以下です。

- A. 発足から10年までの歴史。
- B. 支部の活動と広がり。
- C. 「私と融合研」：会員と融合研との関わり、はじめの一步などを寄稿していただく。
- D. 「学社融合」にとらわれない「まち育て」や「次世代育ち」のような実践も収録する。
- E. コラム：「私の融合フォーラムベストワン」を寄稿いただく。
- F. 「プログラム研究開発」の実際と最前線(学社融合のプログラムづくりの基本や配慮項目)。
- G. プライアン・アシュレイさん(第2回習志野大会講演者)に寄稿していただく。
- H. 「第10回融合フォーラム in 東京」での発表内容(全体テーマ：学校が変わる・地域が変わ

る・そして私が変わる学社融合～学社融合の10年の歩みと今後を探る～)を盛り込む。

<会員へのお願い>

- ・記念事業の実施にあたっては、融合研役員会・融合研事務局及び「融合研プログラム研究開発委員会（現在37名の委員で構成）」と一緒に推進して行きます。
- ・記念誌への原稿依頼を今後お願いしますが、その際はよろしくお願いします。
- ・融合研創立10周年記念事業委員会の委員は、現在矢吹正徳さんと阿部道彦さんと岸裕司の3名です。
- ・ついでには、「融合研創立10周年記念事業委員会」の委員になっていただく会員を募集します。
- ・応募いただける会員は、岸実行委員長（pangea@pb3.so-net.ne.jp 電話 03-5689-5711 Fax 03-5689-5710 (株)パンゲア)までお申込みをお願いします。

1 「第10回融合フォーラム in 東京」の記録

融合研も設立10年目に入りました。そこで10回目を記念して東京で開催された表記のフォーラムには、会員はもとより各界からたくさんの参加を得て盛大裡に終了しました。その様子を記録でお知らせします。なお詳細な記録は、10周年記念事業の一つで出版される記念誌の中に掲載する予定です。

第10回融合フォーラム in 東京

学校が変わる・地域が変わる・そして私が変わる学社融合

～学社融合の10年の歩みと今後を探る～

1日目(8月19日) 全体会

パネルディスカッション

- 「学社融合の10年の歩みと今を語る」 成果と課題の明確化
コーディネーター：渡辺喜久（静岡県中学校長・融合研副会長）
パネラー：宮崎 稔（千葉県・小学校長・融合研会長）
岸 裕司（千葉県・秋津コミュニティ顧問・融合研副会長）
野澤令照（仙台市・小学校長・融合研副会長）
中川洋太（厚木市・行政職員・神奈川支部事務局長）

渡辺 パネラーを予定していた庄子さんが健康上の理由で参加見合わせとなり、映像紹介をしてもらった中川さんにパネラーをお願いします。庄子さんから、「新しい世界へ飛び出す勇気を持ってほしい」という励ましをいただいています。

パネラーそれぞれにとって学社融合とは何でしょう。

宮崎 学社融合で私自身やさしくなることが出来た。ご自分が変わるヒントを持ち帰ってください。

岸 子どもをしっかりと社会に送り届けること、責任ある大人になることを考えて活動してきた。お互いのためになるWin&Winの考えが融合の発想。関わりあう相手のことを先ず慮り、学校教育と地域教育をつなぐと学社融合になる。

野澤 融合の考え方でいろいろなことに取り組んできた。学社融合は私にとって大きな存在。

中川 越田さんから多くのテクニックを学び、宮崎さん、岸さんからまちづくりの楽しさを盗ませていただいた。

渡辺 学社融合とは何でしょう、秋津、鹿沼それぞれの学社融合が与えた影響はどうだったのでしょうか。

宮崎 人が変わればまちが変わっていくというのが秋津での実感。当時秋津小は内も外も問題をいっぱい抱えており、地域とは犬猿の仲だった。影響を7つあげることが出来るが、「人が変わった」

- ・不登校はゼロになった
- ・秋津で育った子が中高生になっても学校に遊びに来る
- ・子育てに悩むお母さんがほっとできる場が出来た
- ・サラリーマンが地域に居場所を持つことが出来た
- ・高齢者が子どもと仲良しになり、役立ち感を持つことが出来る
- ・教師の仕事がスリム化した
- ・行政からすると、地域の人が材料まで持ち込んでごろごろ図書室などを造ってくれる。

秋津は広義の学社融合、まちと学校がフルタイムで融合している。一方の鹿沼は、とことん授業にこだわっている。学と社の中のコーディネーターを地域の人が行っているの、次々に人材を発掘できている。

岸 大会テーマは学社融合の10年。1996年に鹿沼が学社連携・融合の研究指定校になってから10年。秋津は1990年から生涯学習の研究指定校になった。学社融合という言葉は1995年9月に公的に使用されたが、昭和54年、今から27年前に、新潟県社会教育課長の工藤知規氏から学社融合という言葉と考え方が出されていた。その意味では、学社融合は10年ではなく、「27年目」である。

私は融合の発想とは、二人以上の人または組織同士が関わりあうときに、主体者AとBそれぞれの目的を果たし、場合によっては、さらにCという新しい価値を生み出すことだと定義している。学校の開校日、使用時間を考えると、教育機能として学校が使われているのは年間365日全体時間の18%。そこでの学社融合を「狭義の学社融合」と呼び、施設機能として開放される時間帯は年間の36%もある。そこでの学社融合を「広義の学社融合」と捉えている。広義の学社融合では、住む人、働く人がいつでも学ぶことが出来る。

住む人、働く人がいつでも安心して暮らすことが出来る、ノーマライゼーション社会が実現している。

渡辺 あなたにとって学社融合とは何でしょう。学校がなければ成立しないのが学社融合と言われますが。

中川 私にとっての学社融合は、「なる」ということ。子どもがいますか、学校がありますかと問えば、います、ありませんと答えますが、地域の子どものなっていますか、地域の学校になっていますかと問えば「なっています」という言い方。子どもや学校が存在感を得るということで、学社融合という手法で地域の子どもの、地域の学校になっていく。一番大事なのは誰かが一歩前に出ること。それを一押しするコーディネーターが必要。

野澤 学社融合は、さまざまな物にアプローチしたり挑戦したりするときの切り札になっている。学校を良くしたい、地域と一緒にやって行きたいという時に役立ってきた。不登校の子どもの問題なども含め、人と人とのつながりが役立っている。一人の大人、親として、子どもたちに自信を持って引き継げる社会をつくっていく。学校が社会、大人に向かって仕掛けるものがある。やれるところから、関わる大人、子どもが楽しくやりながら進めていく。

渡辺 (大会資料各所から融合のイメージを紹介し) 学社融合って、本当に有効なの？

岸 有効です！学校の教員は代わる。秋津の未来を考えたとき、まちを存続させていくためには子どもがいることが絶対条件。育った子どもが、家族を持ち子どもを持つ年齢になってUターンしてくるかどうかがまちにとっては継続の意味で重要。秋津小は2003年には319人まで児童数が減ったが、翌年以降、350人、348人、今年は352人と増えている。Uターン、Jターンしてくるような住みたいまちを創造できてきたのは、学社融合という視点で活動してきたからと捉えている。

中川 生涯学習課に入ったが学校教育課とは何にも話をしない状態だった。学社融合のためにということで話し合いが必要になった。だから有効。地域の人に「これをやってほしい」と話をすると、住民側から、あれもやりたい、こうもしたいという話が出てくる。学校や先生によっては地域の人に「お任せします」とすべてを投げってしまう例もある。学校を知っている人間が社会教育をやることは大切。それにより、学校と地域が結びついていく。

- 渡辺 学校に来た地域の人に子どもが感動し、その様を見て先生が感動。さらにそれを見て子どもが感動する。こんなところが学社融合の良いところ。秋津のスタート時の難しさは？
- 宮崎 先生は先生の立場しか知らない。それでは子どもは人として育たない。一人一人が人間として輝いていけるためには、教師が地域の人と一緒にやっていくことが大切。はじめ、秋津は先生と地域の人が敵同士だった。佐竹さんや岸さんと、「融合って仲良しって事だよ」と進めてきた。進めていくと他の校長や教育委員会から批判が出た。岸さんが悪役になってくれた。市役所や市長にも話をしてもらい、「これは地域がやりたがっているから。」という形にして、校長の立場を傷つけないようにしてくれた。地域の人を育てることも大事。学校でキャンプをやり、来てくれた人に「あなたが来てくれたから」というと、仲間になってくれ、次世代を育成できる。PTAというのは、否が応でも会員になる。PTAに学校の思いを叩き込んでいくと、卒業してもその考えを持ち続けてもらえる。秋津がいいのは多頭制だと思う。これは誰さんがやってくれる、このことは誰さんがというやり方。地域のうるさい人が見張っている気になっても、いろんな人が進めるから、どこかで進んでいく。
- 岸 中央教育審議会で土江博昭雲南市教育長が「学校教員の社会教育に対する意識改革が必要だ」と述べた（中教審生涯学習分科会平成18年6月2日）が、私は、実践を通してやっていくことが必要だと思うので、学校に社会教育とつなぐ専任の教員を配置することが必要だと考えている。すでに文部科学省は学校の教室開放事例や、そのソフトまで紹介して促進を呼びかけている。待っていては改革できない。国は「やっていいですよ」と言っているのだから、融合的発想で、地域の課題に自らの課題として取り組んで行って欲しい。
- 渡辺 文部科学省子どもの居場所作り推進室の佐藤さんがお見えになっているので一言。
- 佐藤 官僚は情報はいっぱい持っているけど現場は見えていないので、よく聞いていきたい。

《分散会記録》

6つの分散会に分かれて「私と学社融合」というテーマでフリートークングを行いました。一部の分散会で記録が間に合いませんでした。事務局に届いている分散会のみになりますが報告します。

第1分散会 記録

コーディネーター：中川洋太

記録：大畑伸幸

私にとっての学社融合は...

17名の参加者のもと、意見交換が実施された。

初任の小さな小学校で、地域とよく交流できていた。文化祭も地域と一緒にしていた。事務職員として、地域の老人クラブの担当をしていた。

鹿沼市の実践から、「学社融合」と出逢えた。学校に勤務しているとき、コーディネーター役を担う地域の人がいたことで、学社融合がスムーズにできた。千葉県では、派遣社会教育主事経験者が、学校で、コーディネーター役をしている。

元小学校のPTA副会長。昔は、学校とPTAとのつながりも少なく、PTAへの関心も低かった。その中で、具体的な実践を積み重ねた。その結果、読み語りも地域の方に来ていただけるようになった。できることを各自が力を出し合うことで、大きな力になるのでは...

小学校の教員として、環境教育に取り組んできた。その中で、わからないことを専門家や実践者に聴いて取り組むことを続けてきた。子どもには、生涯にわたり学び続けることの大切さを教えたいと思っている。

2000年に米国から帰国。3人の子どもをアメリカの学校に通わせた。現在、学校の英語のボランティアとして関わっている。以前、学校に読み聞かせボランティアとして入ろうとしたが、実現までに2年かかった...。アメリカでは自然にできたことが、日本ではなかなかできない...。学生。現在、子どもへの関わり方を学んでいるところ。子ども会と連携し、実践している。

PTA役員2年目。10年間JCの活動に関わった。その中で、「融合」という言葉に出逢い、岸さん達の事例を知った。今年は、しばしば学校に足を運び、交流をしている。その中で、学校

からのアプローチがくるようになった。現在、地域の高齢者は財産であり、何とか学校と結びつけたいと思っている。

静岡県知事の発案で、県内100カ所の通学合宿を実施中。すぐに取り組める地域とそうでない地域の差を感じている。その理由は、コーディネーターの存在と教育力ではないだろうか…。特に、「地域コーディネーター」の養成が重要。

地域の教育力について…。「通学合宿」、「地域子ども教室」等、実施するにあたり、親にその意義を伝えていたかが鍵ではないか…。これを丁寧にする、地域の教育力が高まるのではないか。

小学校の教員。一人で何とかしようとすると難しい。学年懇談でも人は集まらない。学校の中から動こうとするには、内部に抵抗勢力もある。

学校や家庭で命の大切さを伝えたいと思い、1997年から活動開始。学校へのアプローチの仕方がわからず、5、6年かかった。「ハンナのかぼん」という具体物があることで、学校に入ることができた。そのことを通して、学校に地域の方が入るきっかけとなった。

NPOを4つ主宰。その活動の中で、学校との関わりや地域との関わりが生まれている。学校サイドに、活動への理解の差があると感じる。どのように融合させればいいのか…。

学校へは、GT(ゲストティーチャー)に来ていただいていた。戦争体験を話していただいたり、田植えや昔の遊びなど…。ただし、GTがお客様になっているように感じる。ともに創っていくという感じにはなっていなかった。「学習融合」は楽しそうではあるが、目の前の仕事に追われているのが現状。

公民館に勤務。小学校の教員を志望していた。卒論で秋津コミュニティと出逢い、通い始める。子ども達が、いろいろな人とふれあえる、安心できる空間作りが必要ではないか…。現在、公民館で実践中。

現在、学生。岩手の地元では、子どもと地域のつながりがしっかりとあった。今、それが薄れてきているのではないかと感じる。田舎でも、人の結びつきが薄れてきたのではないか…。

「学社融合」を「生涯学習としての学社融合」としてとらえていきたい。地域の想いを学校で実現できる実践をすることが大切では…。

アメリカの学校での体験より。新学期前に、ルームマザー(保護者の学級役員)より、各種ボランティアの募集がある。ルームマザーは、教員と話し合いながら、企画している。

日本では、保護者間、保護者と教員間のコミュニケーションが足りない。私たちの学校という意識が低い。

人と人とのコミュニケーションが、基盤となるのでは…。活動後の「感動の共有」が次の活動の原動力になるのではないかと…。

アメリカでは、1990年「サービラーニング」を学校のカリキュラムに組み込むことにした。その地域での奉仕活動の内容は、地域のニーズに基づいて企画されている。

現在の自分自身のめざすものとして…。何のために「学社融合」をするのか…。

学力の向上、社会規範の向上

学校で、キャンプをしている。ドラム缶風呂にも挑戦した。地域の各種団体等が手を取り合って実施できるようになった。

第2分散会記録

コーディネーター：青木信二

記録：渡邊真知子

それぞれの場所で活動していることを話し、思いを共有すること
一人一人の方がざっくばらんに話せるようにしていく

青木さん(厚木市)；地域活動をしていく中で、融合研に入会。他の組織と融合していく中で、融合の魅力を感じ、現在は自分の居場所として楽しんでいる。研修していく中で随分自分も地域も変わっていくことに気づく。

中森富久さん(PTA会長)；PTAだけでは子ども達を育てていけないことに気づき、秋津を視察。

杉岡さん（世代間交流センター）；大学で老年学を学び、異年齢との関わりを考え、秋津を視察。
鳥越さん（大阪大学大学院）；学社融合は、子どもも大人もまちも育つこと。可能性を持つ、あ
こがれ。

前田さん（神奈川県）；まちづくりのヒントを得られればと思い、会員になる。

當本さん（千葉県）；雑誌で岸さんの著書と出会い、四街道市の「まじゅりんこ」のサポートし
ている。子どもに学ぶことが多い。楽しい毎日を送っている。

工藤さん（岩手県）；青少年センターに勤務。「誰でも」という言葉にからみとられて。押し出
されている子ども達を考える。学びのユニバーサルデザインをテーマに学社融合を考える。

松崎さん（仙台市）；社会教育主事。これからの子ども達の制度設計を考えて。

酒井さん（大阪市）；越田さんの融合塾で学社融合を知る。自分の住んでいるまちや大人を考え
ていきたい。

竹田さん（川崎市）；岸さんの本との出会い。現在は目黒区で社会教育指導員として仕事をする。

角田さん（松山市）；PTA会長、市P連会長。6年前から学社融合を推進。課題とテーマを検
証している現在。

遠藤さん（鳥取県）；教育長。県教委から融合・連携の声がかり、予算は県費で補う（3年間）。
社会教育主事のOB会長をしている。日吉津町は1小学校。居住地の堺市ではマンガのまちづく
り、砂丘よりも水木しげるロードに観光客が多い。

鴨志田さん（立正大学講師）；犯罪心理等について研究、動いているものを理解することが難し
いので、取り組みについて学習にきた。修復的実践、問題解決能力について研究。

本庄さん（宇都宮大学）；空間的なことから子どもの居場所を研究。宇都宮市の陽東地区で実践
している。

岩井さん（島根県）；ネイチャーキッズ寺子屋。体験活動を実践している。教育コーディネー
ターを配置して関わりをもっていく学習をしている。

寺野さん（千葉県茂原市）；千葉大の竹内先生の研究室。教員で、現在は研究生。商店街でのつ
ながり子ども達に持たせ、関係をよくしていきたい。子ども達の社会参加を促す。

船橋さん（千葉県）；千葉大の竹内先生の研究室。教員で、現在は研究生。子どもに地域の良さ
を知ってほしい。地域理解を促していきたい。10冊の本を読むより、一人の人と出会うことの
大切さを感じる。自己実現の場。活用するのではなく、意味のある融合を探ることが課題。

岸さん（千葉県秋津コミュニティ）；子どもの意志で学校に行きたいと思える学校づくり。秋津
コミュニティを発足して生涯学習を推進して14年目。秋津小学校コミュニティルーム開設11
年目。「地域のおじさんになりたい」と言った中学生の言葉に喜びを感じた。継続 研究。実践
することが必要。

学社融合をすすめるための課題

松山市 3年くらいは実践に結びつかない。図書館ボランティアをすすめていくことに決めた。

60人の保護者。読み聞かせは1000人位いる。おやじの会は42校。内容については様々。
昨年からの安心安全なまちづくりを実践。情報を多くの市民に知ってもらうためのシステム整備。
市P連で運用。大学にも働きかけ。

厚木市 実践を伴わない論理がない。子どもと一緒に！を必ず実践。地域が動いたら学校はそっ
ぽを向く。学校が動き出したら地域が動き出す。

習志野市 先生に限って言うと授業が大切。先生が授業を充実していくこと どうしたら？先生
が発信していくこと どのように？の方法が重要。

吉野さん PTAの役員決めが大変。嫌な人間関係を見る。お酒を飲む機会があると、話しやす
い。学校が荒れて、押さえられないとき、地域に信号を出せるのではない？地域は人材の宝庫。
成功する秘訣は？

岸さん 先生は何が困っているのか？を観察するとヒントがある。生き物を育てることを考えた
い 学校の思い。生活環境をよくしないと無理 ふれあわせたい 親の思い。その一致点が田ん
ぼづくりになった。

青木さん 子どものために 役員終わると終わり。共に楽しみ 共に学び 共に生きる考え方が
大切。

- 中森さん** 親が働いていて参加できない。核家族が多い。片親の家庭が多い。昔に戻す 地域の人がかかわる アクションを起こす
- 當本さん** 父親の関わりが少ない。秋津に行ったら父親がいっぱいいいた。知らないことを交流の中で知ることがたくさんあった。いろいろなことを教えてもらえた。一代で終わらない活動。学校で居場所がない子も救われている。
- 青木さん** 子縁のつながり 活躍する場で活躍できると感動する。
- 杉岡さん** 社会貢献している場所 学校。子どもがいなく、當本さんと立場が似ている
- 青木さん** 人の輪が広がっていき、顔が見える街づくり
- 竹田さん** 何も困っていない。新興住宅地ばかりで、古い人たちと融合できない。京都、大阪のベッタウンのようなもの。仕事としてやっていたことがあって、今はまだ何もできない。
- 青木さん** 地元出身者がいない所。新興住宅地と古い町の人たちが交流を始めた。お互い認め合う。
- 岸さん** 子どもの数が減ると、子どもが何度も競技にでなければならぬ。その中で、授業と合わせながら学校と地域の「合同運動会」に変えて、学社融合していくことができるようになった。学ぶことを共有すること。
- 栗田さん** 子縁 地縁がないところもたくさんある。
- 島根県** 学校でできないことが多々ある。サポートしていく部分。
- 鳥取県** 社会教育領域から学校へ促がすことがたくさんある
- 松崎さん** 赴任先は荒れた学校だった。社会教育主事経験者の校長先生が学社融合の手法で事故報告のない学校になった。地域の人たちが考える場の提供の具体化
- 青木さん** 地域の人たちがどれだけ地域を信頼しているか、それが大切なんじゃないか
- 鴨志田さん** お互いの関係性を持つことができることが大切
- 岸さん** 授業を開く 学社融合、施設を開く 教育委員会が規定を作って、4つの部屋の機能、施設を開放した。行政内融合が必要ではないか？
- 工藤さん** 社会教育に出て2年目。良かれと思ってやっていることでも、違うことが多々ある。そのようなことがないように気をつけている。受け入れのプログラムをきちんと作って作業活動しています。

第3分散会記録

コーディネーター・車育子

記録： 鈴木一彦

分散会に参加している札幌、静岡・芝川中、山口、大阪、愛媛、厚木、宇都宮大、さわやか福祉財団、千葉・南房総、静岡・富士宮、研究者、高知、千葉市、代々木高等学院、仙台市などの各地域・組織から、携わっている活動を含めての自己紹介がありました。

その中で、一つの焦点になったのが、学校や教員との関係がどうなっているのか、融合を進めていく上での関係がどうあればいいのか、について、話し合いました。

以下は、その際に出た主な意見です。

融合と教師との関係は？

先生方にアンケートを取ったところ、子どもが変わっていることには気付いている。率先してやらないけれども、賛成はしている。

30年近く活動しているので、先生方の評価はある。小学1年生が自分で本を借りに行くことなど、教員生活では考えられなかったと言った先生もいた。

おらが学校という意識がある地域。融合に近い部分が田舎にはある。

その一方で、教職経験者、あるいは現役の先生からは、週5日制や部活動などもあり、地域との結び付きは大事だが、あれやってくれこれやってくれというのは、少しきびしいかなと。

先生は打たれ弱いので、ガードが堅い。評価するのは好きだが、評価されるのは嫌い。先生方に安心感を持ってもらわないと融合は進まない。道で地域の人と出会って、会話ができれば、それで融合でもいいと。

教員時代は、指導主事はえらいもの、PTAは煙たいものだった。指導主事もPTA会長も経験

して、指導主事は教員の応援団、PTAは学校の応援でありたいと。ただ「学校人」だったので、PTAをやって1年間ぐらいは地域の言葉が分からなかった。などの意見がありました。

授業で融合することで変わっているのか？

PTAで読み聞かせをやってきたが、初めに関わった先生方はだいぶ変わった。ただ、読み聞かせの活動は国語力を付けるために始めたのではない。国語力が付くと言われるのは迷惑。

先生は一つの空間で他の人と何かをやることに慣れていない。それで複数の人でやるチームティーチングよりも、クラスを分割する少人数学級への移行になっている。

民間でも共同経営はいやがる。それは先生も同じ。いままでは官は立派なものだったが、欧米経済などの影響で、自由は勝ち取れということになった。学校を開かせるためには、市民がコミットしなくてはならないのでは。

第6分散会記録

コーディネーター・江口勝善 記録：榎谷佳純 ビデオ撮影 佐々木徹

江口勝善 江口と申します。一昨年まで小学校に勤めていまして、いま、幼稚園に勤めております。地域こども教室「まじゅりんこ」の代表もしています。

私は、出身は熊本県の水俣、千葉県に来て3度目の職業として選んだのが教員でした。校長になった時に、子どもたちの姿がものすごく変わったなということを実感としてもちました。教室にいられない1年生。水遊びしたり泥遊びしたりして教室に入らない。小学4年生、夏でもフードのついているシャツを着てくる。ずっとフードをかぶりっぱなし。他の子どもとの関わりを拒絶、内面に閉じこもってしまう。5、6年生になると上目遣いで先生を睨む子どもたち。それに対して先生方は一生懸命やっているんだけどなかなか状況の克服ができない。

学校の領域だけではどうしようもない状況もいっぱい。養育放棄の家庭も。親の価値観も多様化、混乱。母子家庭が多い。学校だけでは対応できない。

学校も高齢の先生方がいっぱいいて、新しい子どもたちの状況に対応できない。

地域にはやっぱり人がいる。地域の人たちと関わるような、地域の人たちに入ってきてもらうような学校を作りたい。地域の人が入ることによって、子どもたち自身が授業が楽しくなっていく。先生も助かる。そういった関係をこれからも広げていきたい、と始めたときに、融合研の存在を知った。同じことをしている人たちがいることを。

学校の都合のいいときだけ頼む連携は、場合によっては、かえって学校と地域の人たちを離し、学校不信を増幅しかねない側面がある。岸さんのいうWIN & WINの関係でやっていくと継続していく。持続するには融合がいい。その中で「触れ合っても先生は替わっちゃうものなの今度はどんな校長が来るんだろうね。校長が替わったら継続するかどうかわからない」という心配がある。そんな地域の人たちと時には対決しながら、学校づくりが誰のために必要なんだ、誰のために学校はあるのか、ということをつつも考えながらやってきました。

堀内ちひろ 神戸大学からまいりました。学校の建築、新しい校舎の建築を通して、地域の方と学校が連携というか、融合していくきっかけづくりをどうしていくか、地域で活動されている方のお話を聞きたいと思います。

藤尾智子 岩手から来ました。役場のおばさんです。行政職30年。今は紫波町役場総務課協働支援室で、住民参加条例づくりを通して、学校でやりたい、地域でやりたいということを何とか実現できるお手伝いのできる仕組みを模索しています。

前田恵子 いま文部科学省で働いています。高等教育で、大学関係ですので、全く分野は違いますが、仕事関係ではなく個人的に興味があって参加しました。徳島出身で小中高と地域で子どもを育てるのが当たり前でした。実際に自分が行政の立場に立って何ができるのか。住宅街で、サラリーマンで共働きで、そういう家族が住んでいる地域の学校で地域の力をどのように活用しているのか、ヒントをいただけるといいなと思って参加しました。

榎谷佳純 大阪です。いまは自治会の仕事をしながら、地域でコミュニティをどういうふうにするかということが基本的な活動のベース。特に、小学校区にコミュニティをとということ考えたときに、学校と地域が一緒に関わることができれば一番有効だろうと思って、なにか仕掛けられな

いかなとやっています。

宅見ヒロ子 大阪市から来ました。今年の3月まで教頭。4月から生涯学習部の市民学習振興課に配属。学校と教育委員会との気持ちの違いにいま悩んでいます。私の主な仕事は小学校区教育協議会、はぐくみネット事業の支援。少しでも自分の視点が定まり、視野を広げられたらと思っています。

峰岸久雄 多摩ニュータウンに住んで20数年になります。少し骨のある同じような中高年を集めて何とかしようよと今少しずつやり出しています。ニュータウンといえども暴力団の家がある。そういう視点が学校現場ではほとんどない。学校から放り出された連中をてぐすねひいて待ってるという構造がある。そういうのを少しずつ変えられればいかなとやっている。去年の春からさびれた商店街のシャッターを開けようと小さな事務所とギャラリーを開きました。

松浦 毅 千葉県の旭市立中央小学校で教員をしています。本年度は1年間、千葉県派遣長期研修生としまして千葉大学の竹内裕一教授のもとで社会科の研修をしています。学校全体としてはまとまっています。保護者と教員との関係も保護者が学校に協力的で良好です。何かいい状態がもっと作れたら生かしていきたいなと思っています。

阿部道彦 私は出版社に勤めています「自然教育活動」(7年ほど前から「食農教育」)という教育雑誌の編集を担当しています。考えてみれば農業というのはその場所から動いてはいけない職業で、その地域にいついてないとどうしようもない。学校がなくなるというのは地域がなくなるということですから、一番その地域が住みやすくなって欲しいという願い、子どもがそういう思いをもつことが大事なんじゃないかな。いまの70代くらいのおじいちゃん、おばあちゃんもってるすごい力を生かせないか、孫に伝えることで親が変わるということを考えています。

間野百子 東京都からです。いまは大学の非常勤で生涯学習の社会学概論を教えています。世代間交流協会に所属。地域の人材を学校教育の中に取り入れて社会教育と学校教育とが連携して、融合して、子どもたちをより良い課題解決に向けて育てていくかということを理念としては学んできた。いいも悪いも含めて実践と理論とを結びつけてこれから勉強していきたいと思い、具体的に実践例を教えていただきたくて参加しました。

山本裕子 宇都宮大学から来ました。私は既存の学校や施設をどのように学社融合、地域開放するにあたってどのように使われているか、を中心に勉強していこうと考えています。もともと別の目的で作られた施設なので、そこにいろいろ問題点とか生まれてくると思うので、そこでの問題点をどのように解決していけばいいのかを勉強しています。

石崎裕子 栃木県鹿沼市から来ました。10年前に先生がとても忙しくて子どもたちと遊んだり、関わったりする時間が少ないので、親が何かできないかと手伝い、それがきっかけで6年前に北光クラブを立ち上げました。楽しんでいるだけでは申し訳ない、子どもたちに還元したいと学校の施設を借りてチャレンジ・スクールをはじめ、そこでのボランティア・ティーチャに授業にも入ってもらい、学校の先生との打ち合わせなども私たちがコーディネート、先生たちがどういことをしたいのかをボランティア・ティーチャの方に伝えて1時間に収まるように、行っています。

原 恵美子 住んでいるのは神戸市の須磨区です。日本公文教育研究会に勤め子育て支援センターという部署にいます。「教育を考える」という冊子の編集担当です。親が病気になって、がっぷり四つに地域と向き合わなければいけない状態に4ヶ月前からなりました。散歩をしているオバサンからいかにワンワン・パトロールが素晴らしいかということをや々と説明を受けたり、子ども見守り隊という登録制度のオジサン、オバサンが犬の散歩でも通勤でもスーパーで買い物をするときにも声をかけてくれ、非常に受身ですが、地域って素敵だな、としみじみ実感しています。

長尾政治 横浜から来ました。教育委員会の学校防犯、防災の担当をやっています。前に、学校支援、連携担当という、ズバリ地域と学校をつなげる、そういう仕事を2年間やっていました。土曜日の子どもの居場所づくり、横浜では土曜塾、自分でやるんじゃなくて地域の人がやる、地域に働きかけて学校と地域の人とをうまくつなげる、一種のコーディネーター的な仕事をやってみました。メダカの学校とか、地域のお母さん方の読み聞かせや語りのグループを学校の国語の時間につなげたり、小学校の低学年から中学生、あるいは地域の人、合同で音読の発表会とかやったことが、いまの自分の地域で子どもの安全を守る取り組みに活かされています。

後藤芳浩 宮城から。小学校の教員です。現在、国立教育政策研究所で社会教育主事をめざして5週間の研修を受けている最中です。研修でも地域の教育力を高めるといった話がたくさん事例を紹

介されながらお話を聞いていますが、具体的にウチの地域では何をどうやっていけば地域の教育力が高められるのか、地域で取り入れられることは何かないかというあたりをもう少し明らかにして帰りたいと考えております。

大内宗泰 島根県の津和野からまいりました。高校の教員あがりですが、いまボランティア支援センターで地域子ども教室、通学合宿の支援、子ども見守り隊に取り組んでいます。

津和野は小さな城下町です。昔の地域力、教育力は残っているが表に出てこない。学校は地域との連携、開かれた学校をと主張するが浮いている今の親の世代は、地域の教育力を拒否、孤立感を持っている。ぼんと背中を押せばうまくいく。いま子ども教室を中心に地域の力は少しずつ出てきている。プログラムを毎回変え、地域の達人が力を発揮。通学合宿も学校と地域、PTA を結びつける工夫を。眠っているのを掘り起こす努力をすれば素晴らしいものが見つかる。勉強して帰りたい。

木村泰子 大阪市から。小学校に勤めています。昨年、大阪市で一番児童数の多い学校の校長として赴任しました。16の町会、とても広い校区で、1543人の子どもたちが普通の校舎にいますから、チャイムが鳴って教室に行くとなんか怪我。ひとつの連合町会でふたつの学校をとの大人の発想・都合に、子どもは立てない。新しい建物ができても校区割りができない、地域がひとつになれないから5年6年だけがこっちの学校、こっちは1年から4年。塾です。兄弟もバラバラ。そういう状況で3年間。赴任してすぐ5月の第1回目の町会長会議に単独で行って、子どもたちのことだけ考えてみんなでいい学校を作りましょう、とお願いしたら拍手が。これが現実。お蔭様で大空小学校という子どもたちが付けた新しい名前の学校へ4月から赴任。児童数は238人。ゼロからのスタートができました。

小山みさ 市川からまいりました。市川市は、平成元年に全小学校にコミュニティ・スクールを作りましたが、私はそこから関わって18年、名称は3回変わりましたが、要するに地域の人たちが子どもたちと関わり合いをもって、主に遊びを対象にして頑張っています。秋津小と市川市の違いは市からの委託事業で平成18年は年間82万円の予算が下ります。

平成元年から平成9年までは、学校のためにやる、学校の先生方の要望に応えようというような動きをしていた。平成9年からナーチャリング・コミュニティと名前が変わり、学校の先生の負担が大きいため学校内でなるべく活動はやめて欲しい、公民館で、というふうに最初の段階では言われて、しかし紆余曲折があって、やっぱり学校はまちの中心、教育委員会の方の考えが変わって、学校自体でやって欲しいとなるのだが、現場の方々の抵抗が大きい。教職の課程に地域教育とか地域の学校、社会教育の課程があって欲しい。生涯学習教諭を学校現場に配置することを組織的にやってもらえれば今よりもっとお互いわかり合えるのではないかと。

中 政勝 四国愛媛県の松山市から。PTA が学社融合に関わったのは、もう7、8年前。いじめ問題、非行問題、不登校問題、なかなか前へ進まない。対策も練れない。テレビでたまたま秋津と鹿沼を見て、あっこれだ。連合会の役員10人が秋津に行き、学社融合の考え方に非常に感動。勉強会だけでもと教育長、市長に直談判。議会の質問で、松山は学社融合を推進していく、と。どこの公民館も、地域も学社融合という言葉だけは、とやりました。で、モデル校も中学校1校、小学校1校作り、小学校の方は今はまちづくりのモデル校にまで成長しました。松山市の場合は社会教育主事に学校の先生でなった人が誰一人いない。だから社会教育と学校教育が繋がらない。10人の社会教育主事をPTAが育てた。

私はPTAです。PTAも子どもがいなくなったら抜けていく。そもそも学社融合という捉え方をまちづくりに変えてしまったらどうか。子どものためにだけでなく、おじいちゃんやおばあちゃん、青年、いろんな人たちが参加して学社融合を活用しながらまちづくりをしていこう。人と人との出会いの中でエネルギーをもらって帰れるというのが、この融合研の素晴らしさだ。

渡辺喜久 去年の4月、芝川中学校に来ました。芝川町は34億の予算の中で30億をかけて芝川中学校内に文教的複合施設を作りました。体育館も作り直しましたし、教育委員会も入ってきました。立派な、席が固定のホールができました。公民館には調理室とか音楽室は作らない。学校のものを使う。芝川の文化を創ろうということで、学校としては音楽活動が非常に盛んですからそれを活かす。パソコン教室も中学校が1クラス27、8人が30人で10台余るから公民館講座で授業に10人入ってください、3クラス分くらいは入れますとオープンにする。学社融合を進めるとき、まず第一歩は何かと言ったときに、校長が必要かどうかを感じることを学校を動かします。

(休憩)

江口勝善 学校の壁が高い、門は閉ざされている。先ほど石崎さんから、教員が忙しいだろうからちょっとした仕事の手伝いに入って広がっていった、という実践が報告されましたけれども、どうですか。手伝おうという気分になれません？

小山みさ 保護者が高学歴だから、先生が何か手伝ってと言うと、自分の能力がないと思われるのじゃないか、何かそうなのかな？ 先生が余り責任感が強すぎて何でも自分ひとりやらないといけないと思うんじゃないかな。時間がないなら時間がないって言った方が楽なのに、なんで言わないんだろう。

峰岸久雄 校長・教頭は管理職で、それ以外はかなりバラバラ。お互い融合すれば、やろうやと乗れるんだけど、事務的に学校で諮られてもほとんど誰も手を挙げないし、これは学校に限らずどこでもそうだが、関係をどう作るかが大事。

江口勝善 それと校長さんによっては、大体私もそのくせがあるんですけども、運動会のときにビール売ったりなんかして、えらいひんしゅくがあったりしたもんですから・・・（笑）。

峰岸久雄 学社融合のこれからの課題は中学。小学校は荒れても力でつぶせる。中学になるとつぶせない。へたすると喧嘩やっただって勝てない。刃物でも持ち出されたら命惜しいし、先生も大変。親だって中学生になれば、ウチはもう子どもに任せてるんですって、もう完全紋切り型。中学だとなかなか入り込めない。

木村泰子 学校が開かないのは教師の問題です。教員が自分のやってることと隣の教室の先生がやってることと比較されたら、同じ教員同士やとまだ自浄作用が働いてて、あんたまだあかんやん、もうちょっと頑張ろうというのが、明日はわが身や、黙ってよう、と反自浄作用がはびこる状況が、従前の教員の文化の中にある。開けないイコール教員が自分を変えようとしなくて、この一言。だから学社融合がなかなか進まない。目的と手段が入れ違ってる。学校を開くことは目的じゃない。教員は給料もろて働いてる。その使命感なり責任感を教員が忘れてたら学社融合は崩れてしまう。学校開くことに反対してる教員に、あなた1人の力で、自己実現をはかり、自分との違いをともに認め合って、ともに育つ力をもつ子どもを育てられますか、と言うたら答えられない。どれだけ素晴らしい教員が集まっても、教員の力だけでは所詮できない。いろんな人に来てもらって、とにかく理屈じゃなくて、ふれあうことから、子どもがどういう人間の力を自分で感じていくか。自分のニーズに合う人に出会える。それをどうカリキュラムに学校として入れていくか。カリキュラムができたなら校長が替わってもカリキュラムはずうっと続いていくから大きくは崩れない。だから学社融合もそんなに難しい話じゃない（笑）。

小山みさ 上手く地域の人と仲良くやっているんなものすごい力を出している先生と、なかなか難しいなと言いたい先生との差はやっぱり出てきていますよね、いま。

江口勝善 中さんの学社融合ってまちづくりだ、という話に納得。教員の閉鎖性を破るのは、まちの人だと思う。私は大工さんとか、鉄骨屋さんとかと祭りで繋がっています。彼らの発想は熱い。学校の場合は正論というか、こうあらねばならないという発想にみんなお互い金縛りになってる。学校の教員がまちの人たちと付き合うことがとても大事だ。

松浦 毅 お家の方たちと関わった場合に、どんな影響が出てくるかなということを先に考えてしまう。学校の方でやりたいことと反れたらどうしようかな、と。考え方が固いと思うが、例えばどういったときに関わりをもてばいいのか、時間的なことだとか、そこらが大事なのかなということも考えました。

藤尾智子 ワークショップで、いきなり同じテーマを、例えば、まちの人たちはこう考えてるんだけどあんたたちはどう思うの？と、ふれてきちゃう。もっとこうして欲しい、私たちはこんなに学校のことを思ってる、というのをまちの人が先生に直接浴びせたとたんに緊張させてしまって・・・。お祭りとか地域の中に先生が入っていくのはもちろん大切だけど、そうでない場合は危険なことも・・・。

峰岸久雄 地域には青少年指導員とか町内会とか組織がいろいろあるが、本来的に融合する団体になっていない。組織の力が融合という形までお互いが高まっていない。地域の中の組織を上手に使って、融合菌に毒されてくれれば、力を持ってるし、組織力もあるから、地域に学校が出てくる、地域が学校に入り込むというのが自然にできてくる。組織がでかくなることで情報交換とか、行政変えるとか、政策変えるとか、もちろん大事だけでも、やはりその単位、地域でどう動くかということが、すごく大事。この融合研はそこをターゲットにして、地域にラブ・コールして。彼らに

こういう意識だとかこういう活動を理解してもらおうと地域での関係がすごくやりやすくなる。

中 政勝 地域はすべてが縦割り。横の連絡がとれない。地域で予算の分配をしていく流れをつくらないとまちづくりはできない。松山市の場合、公民館単位に予算が落ちてくるとの期待感がある。

松山市も中高一貫校にだんだん流れだして中学生にとって地域とは何なのか、行き詰まってしまう。生徒会と共同事業をおこすというのはどうか。小学校でも例えば児童会とPTAが話をして、読書の日を共同発信にしようと。お父さんお母さん、テレビ消して読書をと。そういう児童会、生徒会との関わりがキーワードになると思う。

後藤芳浩 ウチは野澤（令照）校長。地域と上手く融けあって地域との合同運動会、地域との合同防災訓練を実施。運動会は体育振興会、防災も。子ども居場所づくりは育成会のお母さん。夏休みに学校にキャンプで泊まるのは親父の会。組織を使うことで地域との関わりが非常に深くなり結局は地域の教育力が高まっていく。教員と地域との関わりについては教員の中にも非常に温度差がある。学級担任は自分のクラス以外の保護者との付き合いはほとんどない。学級担任を離れて初めて学校全体の保護者、地域の全員というかたちになる。最終的には学校のトップの考え方ひとつ。学校を地域にもっと開放していこうという考え方に立っている管理職であれば、いまみたいに地域と付き合っていける。

江口勝善 先生がもっと自分の地域で自分の地域の人たちと関わるといことが、自分を豊かにするし、自分の視野を広くもつことになる。出会いをいかに広めていくのか、関わりを豊かにしていくか、ということがすごく大事。そこに融合の一番大事な根っこがある。

江口勝善 最後に、一人ずつ参加した感想をお願いします。

堀内ちひろ いろいろみなさん1人ひとりが何かやってらっしゃること、話をうかがって、それだけでもすごい感動でいっぱいいっぱい、嬉しかったです、楽しかったです。

藤尾智子 いろんな方のいろんな思いがすごく凝縮されて豊かな会でした。

前田恵子 いま仕事で教職大学院に関わっていて、教員養成のところで、すごく学力低下の問題があって・・・先生が、自分たちだけじゃあできないから地域の人たち来て、と言えればいいんですね。でも、それを言うてしまうと私たちの仕事は何なんだろう（笑）。

宅見ヒロ子 地域の力をすごく感じた。今の学校の先生は事務的なことで忙しいのではなくて、安全のことなど子どものことを何とかしてやろうと思って忙しい場面がたくさんある。はぐくみネット事業も地域のパワーをどういかに生かしていくかが大事。

家庭の状況で差をすごく感じる。いろんな人の力で関わりぬくためにはどうしていったらいいのか考える機会も与えていただきたい。

峰岸久雄 仕事で学校の校庭とか環境の設計をするが、学校がもっと参加できるといい。どんな樹を植えようとか、グラウンドを芝生にしたいけど管理が大変、いやみんなでやればいい、地域やPTAと子どもが、先生と一緒に芝刈りするとか。行政も、現場も、上手にやると費用も抑えて大きいものができる。育てる、管理するということが教育につながる。難しいことを考えなくても身近でそれができるのでは。楽しかったです。

松浦 毅 自分の考え方は、凝り固まっている部分が随分あるなあと感じた。心がけて地域と交流をもって融合ということで考えていきたい。ありがとうございました。

阿部道彦 実践の裏づけのある言葉ひとつひとつ、ありがとうございました。よく風の人、土の人という言葉がありますけれども、先生って風の人、自分の住んでるところでは当然土の人になるんですが、それと地域に土の人がいる。その力が上手くあっていけばいい。

間野百子 融合研に参加すると元気になって帰れるとか、地域で頑張るエネルギーを、エッセンスをもらえるということが少し垣間見れた。

山本裕子 今日いろんな立場の方々の話を聞いて、いろいろと勉強になったので、またこういう機会がありましたら参加させていただきたいと思いますのでよろしくをお願いします。

石崎裕子 10年間活動してきましていろいろな立場のみなさまの話を聞くことができました。それをこれからの活動に生かしていければいいなと思いました。

原 恵美子 よく国づくりは人づくり、人こそすべてという言葉がありますが、こういうふうに短い時間にパッと集まって、こんなに熱く語れる（笑）融合研とは・・・。ものすごく充実して勉

強になるひとときをありがとうございました。

後藤芳浩 生涯学習と社会教育、全体からは学社融合はごくごく小さい部分だと研修で学んだが、現場からすれば非常に大きな問題。指定管理者制度の問題とか 2007 年問題も今後考えていかなければいけない。

大内宗泰 子どもを中心にした地域づくりをしっかりと引きずり込んでいけば先生方が理解する。コミュニティがしっかり確立すればそこに来た先生もそれしかない先生が変る、意識が変わる。われわれが先生を変えないと、とても先生が自ら変わるとするのは難しい。地域社会の親父やオバサンが、先生を変えていく力をぜひ今から持ちたい。

木村泰子 大空小の教職員は 25 人だが、困ったときは助け合うけど、それ以外は自分らしく、自分の好きなことをしっかりやろうと。それひとつだけは、絶対みんなで共通理解して守ろうと。自分が自分の学級の子を育てるといような、そんな驕りは捨てて、全教職員で全部の子どもたちを育てる。PTA も全員がサポーター、必要だと思うことは全員でやろう。これがまちづくりに。すべての地域の子どもたちは地域の人たちみんなで育てようというところにつなげていきたい。

2 日目

シンポジウム「学社融合の未来を探る」(概要)

コーディネーター 越田幸洋 記録 五十嵐

1 シンポジストより

(1) シンポジスト

藤尾智子 岩手県紫波町役場共同支援室勤務 30 年のうち、15 年間は公民館、生涯学習など。学校も町もチームで子どもを育てる。そんな組織を作っていきたい。

野澤桂子 仙台で 20 年のうち半分を小学校、半分を中学校の教師として勤務。

針生英一 仙台市で民間企業を経営。かたわら NPO を主催し、地域を活性化する情報発信の手伝いの仕事をしている。

矢吹正徳 日本教育新聞で記者 20 年。

渡部恒久 北海道の人口 3700 人ほどの町の派遣社会教育主事。「風と土」(ふっとじ)の言葉にはげまされてがんばっている。

渡邊真知子 栃木県鹿沼市立北小学校の北光クラブ。子どもたちの教育を学校の先生と一緒に考え、実践している。

(2) 学社融合についての考えを中心に

【先生の立場で】<野澤>

・最近の子どもは、群れて遊ぶのはうまくない。周りにたくさんいる人と出会ってほしい。

【社会教育の立場で・・・】<矢吹、渡部>

・子どもではなく、それを支える大人にターゲットを向けるのが社会教育の仕事。
・学校の先生の意識を変えるのはあきらめ、意識が変わらなくてもできる方法を考えていきたい。

【地域の視点から】<針生>

・子どもたちに社会人基礎力(チームで動く、前に踏み出す力)をつけていかないと未来がない。

【コーディネーターの立場から】<藤尾、渡邊>

・総合学習で学校に入ってくれる一般の方がまさにコーディネーター。
・「学校のことが分からない」と言っている地域の人が実は一番知っている(無知の知)。
・先生がいやなときにいやだと言える関係を作るのがコーディネーターの役割。

(3) 学社融合の未来

【必要なパートナーシップ】<矢吹、針生>

・対等なパートナーシップ、お互いが言いたいことを言える緊張関係が必要。
・学校と地域のビジョンの共有、夢を議論すること、戦略を持つことが大切。

【地域として、大人として】<矢吹、渡部>

・市民が、今の子ども達の現実、「学校」や「授業」を知ること。そして学校への働きかけが必要。

「これから大切なこと」の視点での議論が欲しい。

- ・まちの人が学校にまちの話を持っていけるようになったらおもしろい。
- ・町内会や学校などチームとしてうまくいかないところを支えられるような大人を増やしたい。

【学校は】<針生、越田、矢吹、野澤>

- ・学校の管理職が、地域など他のものを取り込んで学校が成長していくという感覚、感性が必要。
- ・先生がSOSではなく、授業のプロとしての地域との関わりが大切。
- ・先生は基本的にまじめ。努力を重ねていると言われることを受け入れられない状況もあることをわかってもらいたい。

【行政として】<渡部>

- ・行政による「良いサービス」に慣れた住民に受益者負担はむずかしい。
- ・子どもがいなくなった大人を動かすのがチャンス。

【コーディネートすることは】<渡邊、石崎>

- ・北光クラブでは、私たちができる学校の負担を担っている。そのことによる時間的なゆとりで、先生が良い授業ができればそれでいい。
- ・「お金がないなら自分たちでやればいい」の発想で行っている。
- ・役割分担をしっかりする（学校、保護者、PTA）。私たちは、それをつなぐ役割。

2 会場とのディスカッション

- ・教員の方向、目的を変えるのが管理職の仕事。学社融合は手段。子どもを育むのが目的。<木村>
- ・学校には、説明できない事情を持った子どもが複数いる。地域の方に説明できずに迷惑をかける可能性がある。学年の歩調を合わせること、周りの教師の意識を高めるなども必要になる。<赤羽>
- ・「ニッポンを元気にする校長の会」（事務局長は玉置崇愛知県小牧市立光ヶ丘中学校長）はホームページによる情報発信を行っている学校の会。単身赴任の家族、他学年の保護者などが学校の様子を知ることができる。その制作にあたり、地域の人がどんどん学校に入り込んでいるなどの良さがある。<宮崎>
- ・学校の敷地内にできた公民館を利用して地域と協力してオペラを行っている。音響、美術のプロの関わりなどの中で盛り上がり、教員にも徐々に浸透しつつある。<渡辺>
- ・授業研究に地域の方が参加している例は？<中川>の質問に対して・・
- ・地域の方にも授業後の研究会に参加してもらっている。うれしい感想の反面、先生の比較などの場面もあるのが残念。
- ・もう一度来校してもらい会議に参加してもらう方法や、担任と地域の方が感想を書いた紙を渡しあうことの繰り返しで、批判的な意見が少なくなった例もある。<越田>

3 シンポジストからの感想

【「融合」について】<矢吹、渡部>

- ・どういう教育を目指すのかを共有することが大切。その手法としての融合がよいのでは。
- ・融合研がグレーゾーンであるところが好き。それがあからおもしろい。

【これからのこと】<渡部、針生、渡邊、野澤、藤尾>

- ・学校教育にはやらなくてはならないことがある。社会教育にはない。でも目的を持ってやらなくてはならないものがあるはず。そんな方向を見据えていく自分でありたい。
- ・「自分づくり教育」という言葉で提言している（ネットワーク、コーディネータ組織を作る。意識の高い市民を発掘、育成。）。これからも地域で人材発掘、育成の提案をしていく。
- ・北光クラブは10年になる。転職した先生や卒業した子どもたちも声をかけてくれる。そんな関係を続けていきたい。
- ・先生は学校の地域では孤独。地域の人にたくさん声をかけられると舞い上がるくらいよろこぶ。すごいパワーを持っているのが教師。そんな先生たちを理解して欲しいし、私はそんな先生とつながっていきたい。
- ・お互いが自分のものを持ちながら、社会をよくしていこうという共通した視点を持っていきたい。

いろいろな人と都合のいいときに仲良くしていく関係がまちの人とできないかな。

参加者の「アンケート」から (提出 18名)

今回も全て原文のまま報告します。

- 1 会員(10)名 非会員(8)名
- 2 **あなたは、このフォーラムについて何で知りましたか。**
(7) 会報
(0) 新聞や雑誌の案内(それは、)
(11) その他(会員から、メールで誘われて、会員の講演で)

3 このフォーラムは、何がよかったですか。(いくつでも)

- (11) 8 / 19 パネルディスカッション
- (15) 分散会
- (8) 懇親会
- (13) 8 / 20 シンポジウム
- (6) フリートーク

全日程を参加できなかった方のものもあります。

4 このフォーラムに対するご意見・ご希望

本当に楽しく、勉強になりました。

越田さんの名コーディネータでシンポジウムが深みのあるものになってとてもよかったです。私自身、学社融合について改めて考える機会を持ちたくて参加しました。多くの人の考えや実践をお聞きして少しずつ像・イメージ(学校経営、学社融合)が固まりつつあるなどと思っています。

中身の濃いフォーラムだった。講演形式でないのが、皆が思いを噴き出す。話が聞けない分科会がなかった。分散会で配布できる自分宣伝のための資料を用意すべきだった。

10年の歩みをコンパクトに、しかしインパクトがある編集でとても興味深く見させていただきました。パネラーの方が話された内容は、皆とても重みのある話でした。

前向きで夢いっぱい、実現しようとする(学校と地域を高める)研究会であると改めて感じました。10年経つということですが、すばらしいと思いました。

教師の立場の方々が、真摯に教育を考えている方が多いので、その意識が学校・地域・自分自身が変わる素晴らしいチャンスになっているようなパワーのあるフォーラムになっていると思える。本音の聲が聞けること、それを言えるフォーラムは、とても良いムードであり大事にしたいです。

分散会はよかったです。人数も手頃。話したくて集まっている人達が、雑談に少し統制のとれた形での話し合いは120分がちょうどよし。ただ自己紹介タイムが少しもったいなかった。すでに名簿があるなら、ある程度の情報を組み込んだ分散会内の名簿を一人ひとりに配られたら、もっと話したり聞いたりする時間が持てたと思う。

分散会って何?分科会ではなく、参加者が自分の思いを語る時間が作れたことは、とてもよかったです。実践している方がほとんどなので、同じような思いを共有して時間を過ごせた事は良かったです。2時間15分があつという間で、もう少し時間が欲しいという余韻が残って企画してくださった実行委員の方々に感謝します。

いろいろな面で参考になることが多く、楽しく参加させていただきました。

いろいろな立場の人とはなしができてとても意義があった。明日のパワーをもらうことができた。今回は基本に戻って・・・と始めてって、訴え!!敵いました。私自身、もう一度理解・整理の場を持ちたかったの。で、終わってみて、最後に会長挨拶の中で、「学社融合でよいのか?名前を変えなくては・・・」とおっしゃった時に、学は学び、社は地域社会(自分の居場所・自分の学び、楽しみ)これが答えでした。ハッと目覚めましたね。やっぱ自分の生涯学習なんだと!!

特別な人(発表する人)とそれを聞く人という関係でなく、参加者全員が自分を語れる大会であつたと思う。内容も一貫していて、じっくり融合について深めることができたと思う。多くの人の協力で責任を果たすことができホッとしています。ありがとうございました。

初めて参加させていただきました。楽しく、そしてたくさんメモをとることができました。このような素晴らしい場を設定していただいたことに感謝申し上げます。

目的を同じくする多くの人々が出会い、その方々の話を聞かせていただいて元気と勇気と発見を持ち帰れる会として長く続いてほしいです。

初めての参加ですが、皆様各地域でご活躍しておられることが素晴らしいと思えた。

今回初めて参加させていただきましたが、自由な雰囲気の一つ一つのお話がスッと心に入ってくるような気がしていました。日本全国に志のある方がいて、深い実践を展開しておいでになることを知り、勇気と元気ができました。

地域の方、学校で働く者の立場からの意見や思いを聞くことができました。立場は違っても願いや望んでいるところは同じと言うことを心強く感じました。はじめて参加させていただきました。地域の方のエネルギーがこんなにもあるのか・・・と驚きました。また2日間お話を聞く中で(自分自身が現職の中学校教員として)、学校と地域の意識の違いがこんなにも大きいということも驚きでした。分散会の中で「教員の意識が課題」「融合という立場から言えば、教員にはあまり期待できない」という発言がありました。融合という立場からは逸れるかも知れませんが、学社融合は、何のためにあるのか？誰のためにあるのか？という疑問がまだ続いています。学校・地域ともに「子どもを良くしよう！」という考えに立てば、負担や苦勞があるのが当たり前(新しい事をするにはエネルギーがいる)だと思います。子どもを良くしようと言うのが教育の基本です。渡辺真智子さんが「子どもがよい思いをするためにできること」と言う言葉は素晴らしいですね。(中略)本物は現実の世界の中での人々の生き方や苦勞・想いを知るためには地域の力が必要ですし、学校にしかできないこともあると思います。矢吹さんがシンポジウムの中でおっしゃっていましたが、「地域のビジョンの共有」が本当の意味でできた時に、子どもも地域も学校も変わっていくのかなあ、と感じました。

5 学校と地域の融合教育研究会に対してのご意見をください

それぞれの立場、バックグラウンドは違っていても集える仲間がいる、ソナ組織であり続けて欲しいと思っています。

学校を地域に開かせるためのノウハウ10ヶ条等のコンパクトにまとめられているものがあれば教えて欲しいと思いました。

本日は参加しませんでしたでしたが、いろいろな立場の人がシンポジウムで話されているいろいろな角度から情報を得る事ができました。このことが、今後必要なことであり、広めていく一つだと思います。

次代を担う子どもを育てるのは社会の責任？といってもその社会がどうか？大人の責任と言っても、その大人が？となってしまう現代だからこそ、意識して安全に健やかに子どもを育てられる大人の意識を認識させられる会だと思う。子ども達の幸せは、融合研が日本中に広められることだと思います。

分散会で、学校の先生が人に授業を見て欲しくないということが何故かという話、シンポジウムでも出ましたが、公教育の大きな欠陥であると思ってきたことです。このことが様々な角度から検討され改善されていかなければ、学校現場の変革は難しいことかと思えます。

今以上に更にいろいろな立場の人が会員となり協力して行ければよいと感じた。またシンポジウムで出てきた話などとてもいい話なので、多くの方が目にできる何らかの形でもっと広報して行ければよいと思う。

タイムキーパーをして、コーディネータの方の大変さがよく分かりました。みなさん経験豊かな方々なのでお話しもいっぱいあるのも分かりますが、端的という方が、もうちょっとという方が聞いている方としても良いのでは・・・と感じました。

様々な形の融合が生まれている中で、融合という考え方を会長が言われている方向を全面に出す必要があると思います。何かができる人ではなく、何かをやろうとする人が入会できる会にしている取り組みも大切にしたいと思います。

多様性と柔軟性があり、素晴らしい会だと感じました。また自分もそうありたいと思いました。

自分はまだよく分かっていないところがあると思います。これから学びます。

本町もこのような動きがあり、期待しているところです。

先生が地域の変化に対応できるだけの幅広さを持つことが大切で、こうした取り組みを多くの先生方に知って欲しいと思いました。

6 その他(どんなことでも)

融合フォーラムへ向けてのご準備・当日の運営等、大変お世話になりました。

全国各地の取り組みにいつも刺激を受け、でも今、間に立って何もできずにいる自分に歯がゆさを感じています。少しずつ自分の思いを実現できるようにネットワークづくりをしていきたいと思えます。

誰でも気兼ねなく参加でき、久しぶりに参加しても気軽に声を掛け合える楽しいフォーラムであり、主婦として生きていて意見を言う場があることが人として世の中に生かされている自分のあり方も認識できる貴重な場です。今年も新しい人に出会うことができ、また私の人生に出会いの喜びをいただきました。

本当にステキな大会をつくってくださって、ありがとうございました。我が家も、互いに一人の大人としての社会を持っていることを見つけれられたのでした。

ただただ皆の元気をもらいたくて参加していたことでしたが、いつの間にか自分自身の居場所になり、地域の居場所づくりの活動となり、ワイワイガヤガヤ。なにかやろうの小さな輪ができています。皆さんと同じく、仲間づくりですね。

現在は社会教育行政に携わっています。これからの社会教育行政はどうあるべきかを、キーワードを元に考えることができました。また情報を得ることができました。

とても楽しい2日間でした。シンポジウムの途中、授業に直結しない活動についての話が少なくちょっと残念。融合＝授業への共同なのかなと感じました。学校が融合を考えている所ばかりではなく、私のように一地域住民がなんとか入り込んで、これから、という場合、そこまではなかなかです。授業とまでは行かない活動についてももっと話が聞きたかったです（まちづくりとしての観点で）。シンポジウムはとてもよかったです。

今度参加する時は、全日程で来たいと思いました。

スタッフの皆様、素晴らしい研究会をありがとうございました。

学校から発信して始まった学社融合への取り組みなので、3年目にいくつかの点が見えてきています。問題解決のエネルギーをいただくことができました。

40人近くの方が、自分の意思でフリートークに参加してくれたことが、この会に対する評価かな？ 会員番号が現在の会員数の約半分になっているのは何故？ このことも考える必要があるかも・・・。

(注；融合研では幽霊会員を作らないということで、入退会を自由にしています。役所の職場が変わったりして、会員である必要が無くなったりした方は、無理に引き留めたりせず穏やかに退会ができるようになっていきます。しかしその番号は欠番にしておりますので、新規の会員はその続き番号になります。一方、再入会するという方は、元の会員番号が復活するというシステムになっています。 宮崎稔)

2 東北・北海道支部「仙台フォーラム」から

10月14日(土)に東北・北海道支部主催(仙台市教育委員会との共催)で、「融合研設立10周年記念事業 ；仙台フォーラム2006 & 地域子ども教室研修会」が、野澤令照支部長が勤務する仙台市立黒松小学校を会場に開催されました。翌日の15日(日)は、「ゆうごう子ども教室全国研修会」であったこともあり、北海道から四国・中国地方までの会員や子ども教室関係者、それに仙台市の教育長さん以下多数の地元の方が参加し、熱心にまた充実したフォーラムとなりました。

フォーラムは、最近文部科学省でも重視している「キャリア教育」に焦点を当てて、黒松小の実践をもとにパネルディスカッションの形で進められました。仙台市の会員である針生英一さんが関係するNPOと学校との実践は、一般に言われる職業観に特化する狭い意味でのキャリア教育に留まらず、子ども自身の主体的な生き方を育てるという「自分づくり教育」という名称で、20時間前後の授業時間を使って実践されています。

はじめに針生会員から、自分づくり教育の授業概要がダイジェスト的に紹介されたあと、パネルディスカッションになりました。黒松小の先生からは、「子どもの学びの実態に合った授業にするためには、NPOの人が授業の中心になる場面とそれをつなぐ教師が主体的に実施する時間との共存が大切であった。」という生々しい発言もありました。また、NPOの方や東北経済産業局の方からは、学校の協力を得ることや時間の調整をすることの難しさ等、学校現場に対する戸惑い等についての発言もあり、参加した人からは、「学校側(先生)も、学校へ入る人も本音での語り合いになって、たいへん面白かった。」という声が圧倒的に多く聞かれました。ここから、さらに質・量ともに良い授業実践が行われるようになることが期待された内容でした。

2006.10.14.学社融合フォーラム in 仙台 基調報告「キャリア教育への取り組み」

山崎賢治；準備の時間をお借りして針生さんのご紹介をしたいと思います。

株式会社針生印刷の3代目として30歳で社長に就任されました。ITをいち早く事業に取り込みまして、ITの分野で協同組合「マルチメディア・マジック」を設立されたりしながら情報化に取り組みされてきました。最近では企業と地域の関わりを重視しまして、NPOとの連携を深められまして、教育や地域の情報化活性化をテーマに幅広く活動されています。それでは針生様、よろしく申し上げます。

(キャリア教育-2.wav)

針生英一；皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただいた針生でございます。今日はキャリア教

育の実践ということで、私どもが昨年から取り組んできた事例を皆様にご紹介させていただきたいと思えます。私どもが今取り組んでいますのは、経済産業省からの委託事業で、地域自立民間活用型キャリア教育プロジェクトという名前で、全国29の地域で展開されています。そのうちのひとつが仙台ということで、事業としては17年度から3年間です。私どものような民間コーディネーター、企業とかNPOが地域特性に合わせた独自のキャリア教育プログラムを開発します。「各地域の教育委員会、学校、産業界と連携してモデル事業を推進して下さい。この3年間の中で課題を整理してプログラムのバージョンアップや地域的な展開を推進して下さい。4年目以降、きちっと自立的に展開できるように今のうちから考えてやって下さい。」という事業でございます。経済産業省は産業をつかさどる役所でございますので、これからの産業とか企業の育成、地域活性化を目指していく上では、そういったものを担っていく若い人材をどんどん育てていかなければならない。ある意味で文科省の施策とダブっているところがあるわけですが、経産省の場合は産業人材育成という視点でこの事業を展開していると言う事でございます。

昨年、東六番町で展開しました授業の様子をビデオで編集しております。だいたい20分ぐらいのビデオなんですが、先ずこれをごらんいただきながら、私どもがやってきたキャリア教育の全貌を見ていただければと思えます。

(キャリア教育-3.wav 2時間15分余り)(キャリア教育報告-1.wav 42分余り)

私どもはだいたい20時間ぐらいのプログラムを作っております。昨年度は東六番町小学校6年生、それから黒松小学校5年生、6年生で展開しました。今年度はそれに加えてウルスラ中学校、ここは小中一貫でございますので7年生ですね、こちらのほうを現在やっておりますし、大学のほうも今年から東北福祉大学さんで後期に展開します。ほかにも今年度1校か2校スタートするというので、後期にやりたいなと思っております。20時間のプログラムというと結構長いようで短いのですが、いろいろなテーマ設定がございます。我々のキャリア教育プログラムというのは、子どもたちの自立心を養うということで、その視点をかかり入れていきますので、一方的に教わるようなキャリア教育とはちょっと違います。

先ず最初にオリエンテーションから入りますが、一番最初に「夢の設計図」を子どもたちに書いて

もらいます。文章とか絵を書いてもいいですし、初めて子どもたちにとっては自分の将来と向き合ってみるという勉強です。この時点では漠然としておりますが、ほとんど初めての経験ということで戸惑いもあるでしょうけれども、とりあえず、先ず考えさせてみる、書かせてみる。自分の将来に対する意識付けを行うというのが「夢の設計図」の授業になります。『20歳で野球の選手になる。なんとパリーグで初めてホームラン8万本を達成する。』こういうように、一人一人まとめたものを発表してもらうんですね。

次の授業は、「riding a bus」という、教室をYesのバスとNoのバスに区切ります。そして様々な仕事に対する質問をして、とっさに判断して、YesであればYesの方に、NoであればNoのバスにということで、ワークショップの中でよく使われるアイスブレイキングという手法でございます。ほかにもたくさん手法があるんですけども、目的は和やかな場作り。アイスブレイキングというのは、硬い氷を溶かすという意味合いがありますので、体を動かしながら、安心して学べる場作りをというのがこのriding a busですね。

次にこれもゲーム的なものですが、インターネットから「動物占い」を出してきまして、自分をどういう動物に属しているかということで、客観的に自分を見つめてみるということをゲーム的にやっています。結構あたっているみたいですね。『人気者の黒豹だそうで、明るく笑いながら困難を切り抜ける。(合ってる、合ってる)』

次に、友達から見た自分の将来像というテーマですね。友達の良いところ、伸ばして欲しいところ、そしてその特性を活かしてどんな仕事に向いているかですね。友達に書いてもらいます。5~6人が一つのグループになっておたがいに紙に書いていくわけですね。悪いことは書かない、いいことだけを書いていくということで、友達はこんなふうに分かることを見てくれていたんだという、信頼感がそこで生まれるんですね。人によって多様なよさがあるということに気がついていく。それが自分たちの小さな自信につながっていくという、そういうカリキュラムです。

次、「推薦状作り」というところへ行きますけども、二人でペアになりまして、お互いがインタ

ビューしあいながら、お互いに推薦状を作る。この推薦状を発表するのは就職試験の面接会場というシチュエーションにしてあります。相方を面接官に、「こいつはこういういい所があるんで、ぜひ採用してやって下さいねというPRをするという、そういうような場面設定になっています。

『一番大切なのは、楽しんで下さい。友達を推薦しよう。「自分を」でなく、友達を推薦しよう。会社の人に売り込まなければいけません。』『推薦状、6年2組****、推薦する人は****さんです。推薦する仕事はレスキュー隊です。推薦する理由は、1年生くらいのときに人が困っているのをテレビで見て、そういう困っている人を助けたいと思ったからです。』この子は将来医者になりたいという・・・この子はアナウンサーになりたいと、早口言葉を・・・『推薦する理由は、一生懸命働いている親の後姿を見て、僕もこういうふうにやりたいなと・・・』『いらっしやいませ・・・』この子はマコロン本舗の息子さんです。跡を継ぎたいと。

次に「お仕事ルーツ」という単元に入っていきますけど、自分の先祖から両親にいたる3代にわたり、どんな仕事をしてきたのかというのを調べてきて、ポストイットに書き込んで時代ごとに貼り出していくという作業をします。貼り出していくとですね、昔はどんな仕事があったとか、昔あって今無い仕事は何かとか、時代とともにどういうふうに仕事が変わってきたか。そういうことを話し合わせて、自分たちの時代にはもっともっと変わっているなということを感じさせるという狙いもあります。もう一つの狙いは、家で仕事について親と話し合う機会を持つ。親の仕事について改めて聞く機会というのはなかなか無いので、この機会にいろいろ話をさせていただくというのも目的の一つでもあります。

それからこの「仕事って何」というのですが、グループで興味ある仕事を先ずカードに書き出してもらいます。様々な質問をしまして、たとえば資格が必要な仕事と必要じゃない仕事と分けてみたり、定年がある仕事と無い仕事と分けてみるとか、そういう質問をきっかけにしている仕事について考えるということをやっています。『70歳でもできる仕事と、そうではない仕事。』『・・・無理だよ、70歳では無理だ・・・』

次はですね、フリーターと正社員の違いということを考えさせます。先ずフリーターのイメージというのを書き出してもらいます、カードに。で、フリーターのいいところ悪いところというふうに分けて、みんなでフリーターについて話し合いをします。『決まった職業についていない、無職。自由業、アルバイト、資格を持たない仕事。』『趣味が自由にできる、自由。』『収入が少ない。』『安定していない。』『ボーナスが無い。』『正社員ですというのと、フリーターですというのでは、実際は一生懸命やっても、イメージは悪い。』『一つのこと一生懸命になれない。夢が決まっていない。』次にですね、元フリーターで正社員の人と、元正社員で現在フリーターの人と、二人来てもらってですね、それぞれの仕事に対する考え方とか、働き方とか生き方とか、そのような体験談を含めて話しを聞く機会を持ちました。

それからこれは、私の知り合いのソフト開発会社の社長をお招きしまして、仕事の内容とか、仕事の楽しさ厳しさ、やりがいとかについて話をさせていただきました。次のプログラムは子どもたちが地域の企業、団体に行って興味ある仕事を調べて来るという授業があるんですけども、その準備的位置づけでもありまして、この社長にインタビューを試みるんですね。インタビューの仕方を、どういう質問をしたらいいとか、理解を深めるためにはどうしていったらいいかということ・・・。

そして次にですね、地域の企業とかお店とか、いろいろなところにご協力をいただきまして、「お仕事インタビュー」ということで、何人かが1チームになりまして、それぞれ興味のあるところに行って、いろいろ仕事について調べてくるということをやりました。ここはデザイン事務所ですね。コマーシャルとか映像制作の会社です。『私は小学校時代からこういうことをしたかったんですよ。』『面白かったです。』『いろんなことを質問したり、発見というか、どうすればいいかということを見たり。』次に自分たちが調べてきたことをまとめて発表します。この際、6年生だけでなく、5年生にも入ってもらって聞いてもらうということをやりました。『社長さんが設計士をやろうと思ったのは、幼いときから絵を描くのが好きだったからです。ですから画家になりたいと思いました。』『この仕事は・・・。』

次は、新しい観点の仕事をしようということで、ホームレス問題をテーマにして、社会には全員分の仕事を用意されていないということ、椅子取りゲームを使って理解させる。みんなが仕事につくためには、椅子を増やすか、一つの椅子に何人かで座るか、いろんな工夫が必要になり

ますけども、社会では新しい仕事を増やしていくということが不可欠であって、一つのアプローチとして、社会の課題を解決するために生まれた「ビッグイシュー」という、ホームレスだけが売ることができる月刊誌があるんですけども、それを出版している会社の取り組み、考え方について、我々のほうで取材してビデオの教材を作っています。それを見ていただきながら、そういう失業問題とか社会の問題から仕事を考えるということ、それから、自分たちで仕事を作り出していくんだと、社会に必要な仕事を誰かが作り出していくんだということを学んでいく。このビデオの中で、ビッグイシューの佐野さんという社長なんですけども、「これからは就職だけでなく、創職、仕事を作り出すということも大切だよ。」ということ、この中ではおっしゃっています。

これは最後の授業で、「私たちの街構想」というワークショップです。自分たちはどんな街に住みたいのか、この街をどんな風にしていきたいのかということ、ディスカッションさせて、それを実現するためにはどんな事業をしていけばいいのか、事業プランを立てさせるプログラムです。仕事と社会というのはつながっていて、自分たちの暮らしや社会環境も、仕事のあり方と密接に関係しているんだよということ、この中で学ぶ。社会をよくするための仕事を考えるということは、市民として自立して暮らしていく協働型市民の育成ということにもつながっていくよ、という考えでやっています。

見ていただいて分かるとおり、カードなどを使って自分の考えをどんどん出させる、それを基にしてディスカッションさせるという繰り返しで進められています。『今までこういうのは無かったけど、これをやったら何か変わるんじゃないかという、改善の提案を…』

最後に自分たちの考えたプランについてグループごとに発表してもらおうという流れになります。『そういう協力できる状況を…』『そのためには認知度を高めなければならないので、有料ですけども、仕事を体験できるという会社を…』『そういうことで仲間意識が増えたりすれば、それで信頼できるようにすれば犯罪が出なくなるし…』『つながっていくんじゃないかと…』

今出てきた男性二人がそれぞれ担任の先生です。先ほどの女性が出ていたのは我々キャリア教育のスタッフです。それぞれ発表したことを黒板に書いていくと、一つの大きな流れが見えてくる。

最後は振り返りですけども、振り返りは毎回子どもたちに、どんなことを感じたということを書いてもらいます。『新しいことがまた生まれるんじゃないかと思いました。』『社会へ出てからの仕事を持ったときの生き方的なものが分かったので…』『ビッグイシューを配っている人にインタビューしたいなと思いました。』『インタビューを通して考えられたのが良かった。』『仕事について意味などが考えられるようになった。』『発表したり、インタビューを通していろんな経験ができた。』『教育は芸術だと思っています。つまり君たちは芸術だということです。発表する力がついたということが出ただけでも、力がついたと思う子がいたということだけで、やってよかったなと思います。』『おかげさまで、半年の短い間でしたけれども、ありがとうございました。これからもみんなといろいろ創っていきたいと思います。』(-3wav28分)

以上、こんな感じで20時間ぐらい。実際先生のお話を聞くと、国語の時間、社会の時間を割いていただいています、実際40時間近くかかったというお話です。我々にも得るものが大きい体験でした。

キャリア教育について我々なりの解説を最後にしたいと思います。我々は企業で仕事をしておりますので、仕事を取り巻く環境がこの10年で大きく変わったと感じております。一つはITによる生産性向上と仕事の標準化、市場主義ということを感じています。コスト競争に勝つということが企業にとって大命題になっていまして、それによって大切なものがだんだんだんだん失われつつあるのでないか。たとえば職人的スキルであったり感性とか経験を生かす。こういったことは時間をかけて育てていくもんなんですけども、どうもその辺がインスタントになりつつあるという事があります。それから終身雇用の崩壊ですね。人件費が変動したということで、パート、アルバイト、人材派遣。こういったことを企業ではどんどんやっているわけなんですけども、それが雇用の不安定化を生み、将来の不安につながっている。それから東京一極集中と地方経済の疲弊ということで、東北の中では仙台一極集中といわれているんですけど、東京のパイと仙台のパイは全然違いますから、仙台で物が売り買いされても東京にストロー状態でみんな吸い上げられてしまう。

そういうことも現実あります。最後に格差社会、2極化ということがレジュメに書いてありますが、そんな時代になってきている。それからグローバル化による変化ということで、国際的な価格競争とか、工場の海外移転による雇用喪失とか、特に地方にとって大きな問題がある。それからコミュニティ崩壊の危機ですね。

それから市民協働型参画の時代へということなんですけど、ここの所はですね、新たなコミュニティに根付く仕事というのが今後生まれてくる可能性があるという分では、一つ注目していく必要があるのかなと思います。それから自治体も非常に財政が厳しくなっていますし、公共事業が削減されているということで、セーフティネット的受け皿が社会から無くなってきていると言う事。こんなふうにごっと見ても、我々の仕事を取り巻く環境が激変してきているというのが時代背景としてある。

そんな中で、子どもの自立心をはぐくむ取り組みというのは、学校だけの課題でなく、我々企業にとっても大きな課題としてある。当然育った子どもたちが企業に入ってくるわけですから、じゃあどうやって子どもたちを育てていくのかということに、企業が持っているリソースも何らかの形で使えるものがあるのではないかとことです。我々が子どものころはなんとなくポケーとしていても、仕事にありつくことができたと思うんですけども、今は仕事を取り巻く環境の変化ということもありましたけども、いろいろな問題があって、子どもの心の問題にもつながっているということがあるだろうと思います。子どもと社会の関わり方について、学校と仙台市の市民センターを拠点として地域を巻き込んだしくみ作りができないだろうかということで、子どもが社会の中で自分自身の居場所を発見できるような場作りができないか。子ども教室なんかもそうなんですけども、学校教育の中でもそういったものがないかというのが我々のチャレンジとしてあったという事ですね。それから、社会の中の自分の役割を見出す。社会と関わるきっかけ作りを何とかしていきたい。そういう体験を通じて小さな自信を育むという、そういう取り組みをしていきたいという事がありました。

それからもう一つは、社会で働く意味について、改めて問い直す必要性が今求められているんだろうな。これはやはり大人の問題ですね。大人もなんとなく働いているという部分があったり、今、特にこの10年15年というのは厳しい時代でしたから、大人も希望を失いかけているということがあって、改めて、働くというのは何なんだということを大人の問題として問い直す必要があると思っています。こういうことに気付く機会を与えてくれた。その中で、社会の中で生き抜く力、経産省的に言うと、社会人基礎力という言葉を使っていますけども、これを育成する機会を学校教育と社会教育の連携の中で提供し続けることが重要ではないかと考えたわけです。

これは黄色のパンフレットの3頁目に図が載っています。人間の成長に必要な要素と、その関係性を表した図ということでとらえていますけども、一番下に人間性とか基本的な生活習慣というのがあります。身の回りのことを自分でしっかりできる。思いやりを持つ。基礎的なマナーを持つということですね。学校の中で基礎学力というのが叫ばれています。読み書きそろばん、こういったものを中心とした基礎的な学力、それから右側に専門知識があります。これは仕事に必要な知識、資格などということで、大学とか専門学校。社会にでてからも、こういう専門的な勉強をしていかなければならない。それから一番上の四角のところには市民性をはぐくむという箱があります。社会を俯瞰し社会とのかかわりの中で自分の役割と居場所を認識する、公共を担う心をはぐくむということで、海外ではよく市民教育ということを行っていますけども、自分も1市民として社会の中で一定の役割を果たしていくんだと。そういう心をはぐくむことが今非常に重要視されてきているわけです。ですからこの真ん中にある社会人基礎力というのは、そういったものを上手くつないでいく、そういう役割として位置づけられているんだなというふうに、我々は理解しております。その中には前に踏み出す力とか考え抜く力とかチームで働く力。こういうものがあるんだろうというふうに思います。

そしてその行き着くところというのは、地域社会や職場の中で多様な人々とともに生活をし、仕事をしていく上で必要な基礎的な能力の育成をしていくんだということ。

それから2番目に、社会の変化に対応し、主体的に多様な人々と新たなしくみや事業を起こす自立した若者を育成していかなければならない。

それから市民協働を担う市民を育成する。やはり社会的な部分というの、この中で十分捕らえていきたいと言う事でございます。

弊社のプログラムの特徴としましては、先ほどもビデオで見ていただいたと思いますが、ワークショップ型授業を取り入れてます。グループワークをたくさん取り入れてまして、一方的に教えるのではなく、自ら気付く、個々のよさを引き出すというような授業の組み立てを意識しております。

それから、家族友人、地域社会との関係の中で、自分を見つめ自分の居場所と役割を見出す。これはいくつかのゲームの中でもありましたけども、お互い認め合う、いいところを、あいつはこういういいところがあるんだ、自分はこういう風に見られているんだということを認め合うことによって、信頼感を造っていく。そういうことが必要なのかなあというふうに思います。

それから、考える。テーマを与えて考えさせるわけですけども、それを紙に書く、ディスカッションをする、まとめる、発表する、深める。こういうサイクルの授業を心がけています。それによってコミュニケーション能力が育ってくるということだと思えます。

それから、様々な地域のプロから、仕事に対する考え方とか生き方を学んでいく。**社会の課題を見つめ、それを解決する**ための事業を自分たちなりに提案するというところで、これはビッグイシューの佐野社長の言葉にありましたが、「創職」職を創るということですね。自分たちで新しい提案を創り出していく。そういうような特徴があるのです。

我々がプログラムを企画する際に考えたポイントであります。仕事とはというふうに講師が一方的に教える一方通行型のプログラムではどうも効果がでないんじゃないかとう考えましたので、双方向性をどういう風に作っていくかということですね。

それから単なる仕事体験とか就職支援のためのプログラムにはしない。気づきを大切にする。考えさせるということをやっていくということです。

それから、子どもたちが将来に向けて一歩前に踏み出す勇気が出るプログラムを考えるということで、たとえばノートの問題を考えても、その根本は自信が無いということに行き着くようです。そこんとこの勇気、背中をぽんと押して上げられるようなプログラムができればいいなあということ考えたということです。

それから公共を担うところ。これは先ほど説明しました。

もう一つ、経済的豊かさだけを追求するという、そういうキャリア教育にはしないということですね。

それから教科との連携ということで行けば、なぜ学ぶ必要があるかということを理解することと、たとえば国語とか社会とか道徳とか、そういう教科教育と連携していくということが、学校教育の中でキャリア教育をやっていく際には重要なことだと思ったわけです。

それからもう一つ最後に、学校で展開しやすいプログラムをどう作るかということですね。我々だけができる、我々だけにしかできないプログラムでは広がりが出ませんので、先生方が自分たちで展開しやすいような、そういったプログラム作りをしていく必要があったということです。

最後、今後ですけども、市民センター（公民館）との連携ということ念頭にしております。今年実験的にタイアップして市民センターの方で5回シリーズのキャリア教育の講座を開催しました。その中で市民サポーター、ファシリテーター。そういった人たちを養成していきたいと考えています。これは市民センターの中でこういった講座で学んだことを地域で生かせるしくみをつくっていく必要があるんじゃないか、ただ学びっぱなしで終わるんでなくて、それが活かせること、地域のために役立てるというしくみを、キャリア教育というのを一つのきっかけにしてやっていきたいなと思っています。

それから我々の取り組みの中で、学生が何人か一緒に取り組んでくれるようになって来ました。教師を目指す学生の体験の場として、教育実習とは違った視点で学校教育に関わる。そういう風なメリットも大きいのではないかと考えています。最終的にですね、自分創り教育の支援ネットワーク、市民の方々とこういうネットワークを作っていくって、地域参画型の自分作り教育、キャリア教育。こういったものに結び付けていきたい。これはまさに学社融合が目指してきたところだと思いますので、キャリア教育、自分づくり教育という中で、こういう流れを作りたいと考えています。

このあとパネルディスカッションがあります。その中でまた、いろんな視点で話が出ると思いますので、また、キャリア教育についての認識を深めていただければと思っています。どうぞご清聴をありがとうございました。

山崎賢治 針生社長、大変素晴らしい報告をありがとうございました。

パネルディスカッション「教育の新しい姿を求めて」 - 1

山崎賢治 それではパネルディスカッション「教育の新しい姿を求めて～キャリア教育への取り組みを通して～」を始めていきたいと思います。コーディネーターを野澤先生にお願いして進めてまいります。なお、ファシリテーショングラフィックを藤尾智子さんと宮崎道名さんをお願いしています。議論の過程をファシグラに残していきます。それでは野澤先生、よろしくお願いいたします。

野澤令照 皆様、改めましてこんにちは。先ほど針生様からキャリア教育の内容につきましてご説明を受けました。それを受けましてこのパネルディスカッションでは、「教育の新しい姿を求めて～キャリア教育への取り組みを通して～」というテーマで話し合いを進めていきたいと思います。仙台市内では先ほどのお話にありましたが、本校黒松小学校、さらには昨年度からは東六番町で実践をしております。冒頭に、子どもがまとめた作文がありますので、ご紹介をさせていただきます。一昨日が2学期の始業式でしたが、代表の6年生が2学期の目標ということで話をしてくれました。原文のままご紹介させていただきます。「2学期の目標。小学校生活の1学期が終わり、残り6ヶ月になりました。みんなで計画し協力しあった修学旅行、みんなで役割を決め大成功したまつのみ祭りなど、いろいろなことに挑戦し、あつという間に過ぎてしまいました。2学期は最上級生としての自覚を持ち、下級生のお手本になるように行動する事と、中学生に向けて勉強もどんどん難しくなっていくと思うので、勉強をがんばりたいと思います。」途中略しますが、目標の2つ目にこのようなことを言っています。「次に、高学年になって始まったキャリア教育では、人々の係わり合いや、いろいろな仕事について調べました。仕事について調べることは、自分の将来のことを考える大切な時間になりました。2学期もキャリア教育を通して、将来の自分の仕事や将来の夢、自分の生き方についてしっかり考えていきたいです。」

6年生の一人がこのような目標を、2学期の始業式にあたって話をしてくれました。実は私もちょっと意地悪なものですから担任の先生にちょっと聞いてみたのです。「先生これ指導したの？」そうしたら「していません。」ということで、子どもが自分の素直な気持ちで書いてくれたことでした。冒頭にご紹介させていただきました。

今日の会は「融合研」という我々団体の会です。とかく建前が重んじられる会があるのですが、冒頭に会長が申し上げましたように手弁当の会ということは、何もさえぎるものが無い、こだわるものが無い。つまり「本音で語り合えるようなものにして行こう」という事を考えています。

キャリア教育について概要説明がございましたけど、そして今の子どもの生の声をお伝えしました。ある意味、大変意義があるということは感じてもらえるのかと思うんですが、この教育を学校の現場で進めていくときに本当にそんなに面白い話ばかりなのか、その辺、「本音は先生たちどうなんだい？」という事があると思うんです。私の立場からすると先生方の本音はちょっと怖いのですが、しっかりと本音で語り合えるパネルディスカッションにしていきたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

それでは黒松小学校が取り組んだ授業の様子を映像にまとめております。それを本校の木村圭教諭に、映像を見ながら解説をしてもらいながら、進めて参ります。

その前にパネラーの皆様をご紹介したいと思います。融合研会長の**宮崎稔**さんです。「できるだけ本音で語ろうと思います。」東北産業局産業人材育成室課長補佐でいらっしゃる**三瓶綾子**さん。「我々教育ではずぶの素人だと自認しておりますが、一緒に勉強ながらやっていきたいと思っております。」針生コミュニケーションズ株式会社の、このプログラムの開発に当たりました、**菊地淳**さん。「今日は先生方の本音が聞けるということで、ドキドキしながら居ります。」黒松小学校でキャリア教育の指導に当たりました6年生の担任の一人、**本木りゑ**さんです。「本音、本音ということがありますが、楽しんでやっている所もたくさんありますのでご紹介できたらと思っております。」会場に同じ6年の先生方も二人おりますのでご紹介しておきます。先生方を束ねてます学年主任です。**今野道子**先生です。もう一人、**阿部美香**先生です。「皆さんこんにちは、私は自分で自己紹介させていただきます。」

あー、失礼しました。(わははは・・・)

「この中で一番若いのかなと思いますので、子どもの視点でお話できたらいいかなと思います。」大変失礼しました、ちょっといい男なので悔しいので紹介をしませんでした・・・というこ

とで（笑）木村圭先生です。（資料紹介）

では、圭先生、よろしく。

木村圭 改めまして、皆さんこんにちは。私は黒松小学校の6年生担任の木村圭と申します。どうぞよろしく申し上げます。

子どもたちに今からキャリア教育をやりますと言ったら、「先生、キャリアって何？」子どもたちがポカンとした顔をして私の方を見るんですね。毎日の授業の中で子どもたちは、たくさんを知りたい、もっといろんな事を勉強したい。きらきらした目でいつも私の事を見てください。そんな子どもたちと針生コミュニケーションズさんの一生懸命考えてくださったプログラム、あとは子どもたちをよりよいものに育てていきたい教師たちの願い、3つの思いを込めてキャリア教育に取り組んでいます。

私たち黒松小学校の6年生は、総合学習のテーマ「いろいろな人と出会いを通して自分の夢を育てよう」のもとに学習を進めています。キャリア教育は、その中でも自分づくりという部分について、針生コミュニケーションズさんのプラン、子どもたちの実態と教師の希い、これを合わせて一緒に考えて作り上げてきた次第です。今日はその中でも特に3時間から6時間目までの授業をごらんいただきたいと思います。

実際、どういうふうに授業に取り組んでいるかと申しますと、1時間目と2時間目、これはファシリテーターさん、針生コミュニケーションズさんのスタッフの方々ですが、「支援者」という意味の方々中心に進めていただきました。

それをずっと見ていましたら、私たち教師サイドのほうで授業したくなってきました、何とか自分たちの授業をしたいということで、3時間目は各クラスの担任が進めました。これは児童がじっくりと課題に取り組めるように、自由に意見を述べる中で意見や考えを皆で共有するという事が目的です。今日ごらんいただくのは、この3時間目から。あとは、子どもたちや学びのスタイルに合わせて様々に形態を変えていく6時間目までです。

「仕事って一体なんだろう。・・・」まずは各クラスの担任が導入部分、どんな事をやっていくのかという説明をしています。「みんなで考えて見ます。今日のやること分かりましたか？」
「ハイ、分かります。」「ぴんと来ない人がいます。教えてあげてね。では、今から4枚このカードを渡します。そのカードに大きく今から言うことを書いてください。自分の関心のある仕事。」「関心のある？」「たとえば先生。」

ここまではほぼ3時間目なのですが、1時間目と2時間目にですね、さっきの東六番町小学校と同じように、お仕事ルーツ、昔のおじいちゃん、おばあちゃん、自分のお父さん、お母さん。みんなどういう仕事をしていて、どういうつながりがあるかという授業をしました。そこで、子どもたちは親の仕事、そういうことに興味を持ってどんどん調べていきたい。仕事の数、種類。そういう様々な多くの事を学んでいます。ここでは一人4つ、自分の関心のある仕事。これをどんどん書いていっている様子です。

「資格が要る仕事か、資格が無くてもできる仕事か？」というように、まずは4つの仕事を出して、グループでたくさん仕事ができます。その中で子どもたちに感じてもらいたかったのは、世の中にはたくさん仕事があるんだなという事にまず気付いてもらう。そして今から行うのは、資格のある仕事、資格の無い仕事、というように、いろいろな条件でカードを分類していく。その中で子どもたちは様々な視点から仕事を見つめていくことで、違い、様々な違いに自分たちで気付いてもらいたいという願いがあります。

「はい、ゆうたくん。」「俳優。」「どうですか？俳優でも外国でやれるかどうか？」

こういうふうに授業を進めていくと、なかなか難しい問題がでてきます。

「外国では先生、政治家になれるんですか？」

そういうような子どもたちでは解決できないような問題ができた時に、教師の出番と考えています。こういう時はみんなの意見を聞きながら、教師は道しるべを示してあげて、みんなで分けて理解を深めていく。そういうような作業を行っていきました。

「その国にどれくらい住んでいるとか、いろんなちょっと条件があるけど・・・」

今までは教師がどういうふうにして分けるかという事をさせていたのですが、ここからは子どもたちから出たので分けていくという授業で進んでいきます。

「これとこれで分けたいという人？（・・・様々に盛んに言い合う・・・）」

車を使う仕事と使わない仕事に分けています。(・・・活発で大騒ぎ・・・)

このあとの授業の子どもたちの感想ですが、「自分が興味のある仕事についてみんなで語り合うことができよかった。」など、仕事について子どもたちはじっくり話したり、お互いの意見を聞いたりした事がほとんど無いですね。だから、そういう体験に対してとても新鮮な気持ちで取り組んでいるということが分かりました。

ここまでの3時間の授業は、児童がのびのびと取り組んで自由に意見を出せるという事を目的にしています。そのため、各クラスの担任が行いました。さらにその考えや発想を細かく拾いながら、みんなで共有するところ。これは児童一人一人を把握している担任の出番ではないかなと考え、私たちが授業をさせていただきました。たとえば今最後に子どもが言ったんですが「銀行員は車を使う。アルバイトは分からない。」と。こういう呟きをととても大切に、この次の授業と、フリーターの授業なんですが、つなげていきました。

「アルバイトは分からない。」と言われたので、次はアルバイトとして稼ぐ、フリーターの授業に入りました。この授業は次の機会にやった授業なんですが、授業形態が二つ変わりました。一つ目は2クラス合同で行った。もう一つは指導する方が教師でなくファシリテーターの方。なぜそうしたかということ、二クラス一緒にすることで、多くの意見を共有できるだろう。もう一つはフリーターについての知識が私たちよりも豊富なファシリテーターの方に進めていただいたほうが良いと考えたからです。

今、(ビデオで)?マークがありました、実はこれ、何も教えてない状態で「フリーター」と聞いて思い浮かぶことということで書いています。だから、どんどん書ける子どもと、後はぜんぜん書けない子どもとに分かれていました。

ここで初めてフリーターの仕事について、メリットとデメリットとを資料を基にして見ていきます。このあと見ていただきたいのは子どもの目です。こういう資料に触れたことが無いので本当に真剣な目をしてみえています。

「こっちは、・・・グラフの見方、みんな分かると思いますが、横には年齢になります。だから、給料いくらで、年をとるにつれてどういうふうになっているかということを表します。あともう一枚、こっちのグラフ、これはフリーターのメリット、デメリットです。メリットって言う意味分かりますか?いいこと、得したこと・・・」

ノートに資料を見て気がついたことを書いていくんですが、このころになると子どもたちはしっかりと自分の意見を書けるようになっていました。そしてここ、クラス二つ一緒にした所ですが、気付いた事を共有しあう、たくさんの意見を聞く中でみんながどんな事に気付いているか、ほかの意見を大切に聞いているわけです。

「はい! 正社員は50歳から54歳までの間、一番稼いでいるのに、フリーターは25歳から29歳までが一番稼いでいる。」「はい!」・・・

というふうですね、たくさん子ども達はフリーターに関して自分の考えとか質問、たくさん持つようになりました。

そこで次の授業としては実際に本物の人に聞いてみようじゃないかということで、針生コミュニケーションズさんにフリーターの方、正社員の方連れてきていただいてお話をいただくという場面になります。

「第3回のキャリア教育の授業を始めようと思います。今日は初めて4クラス合同ですね。前回皆さんで勉強しました。フリーターってどういうのだろうねって言うのを学んだと思うんですけどね。なぜ今日は4クラス合同にするかと言いますと、今日は実際に、皆さんの年齢で言えば15歳ぐらい先輩のお二人をお呼びしています。そのお二人は正社員とフリーターという働き方を、両方とも経験されているお二人です。」

今、お二方いらっしゃるんですけども、片方の方はフリーターを経験してから正社員になった方です。もう一人いらっしゃる女性の方は正社員からフリーターになった方。両方の立場をしている方から意見を聞きました。

「えーとね、フリーターを自分は4年間くらいいたんですけど、その間ずーっとイベントの仕事をしていました。最初にイベントの企画を考えてお客さんに提案したり、こういうふうにやりましょうとしていくのか、実際に会場デコレート、フリーター一人ですべてのことをやれば、やっぱりちょっと限界があるのと、やっぱりこういったイベントを受けるにあたって、個人ではでき

ないと思うよ。そういうところで、会社という組織の中に入って大きい仕事をやりたいのか。・・・」(質問・・・)

このようにどんどんどんどん質問が繰り返してきました。正社員からフリーターになったときの気持ちを聞いているわけです。

「大きな差は、時間とお金に大きな差ができたと思います。正社員のときはお金はいっぱい入っても、時間とれなかつたりという事でいやな思いをしたんですけど、今は時間たっぷりあるけどお金は・・・」

というような意見をいただきました。このあとで児童達に振り返りカードを書かせました。その感想を見ると、正社員の方もフリーターの方も自分の夢に対する思いを熱く語ってくれて、二人ともかっこいいと思ったという意見がたくさんありました。夢に対してクローズアップしている子供がたくさんいたんですね。そこで私達教員は次の時間にクラスで授業しました。

子ども達の反省を聞いていくにつれて、夢に対する思いだけでなく、その裏にある厳しい現実、そういう具体的な事にも触れることが必要でないかと感じたからです。

子ども達の理解が一方的にとどまるのではなく、多くの角度から見てもらいたいという願いが根底にあります。そのため、フリーターと正社員の現状についてクラスごとにじっくりと考える時間を持ちました。そのあとに授業の反省カードを見てみると、「今の現実の状況を学んで、夢を追うことと、そのための苦勞を感じました。」「夢を持つことで困難は乗り越えるのかな。」「フリーターは不利だわ。」って書いてある子どももいたんですが。

子ども達は、「様々な生き方があるんだ」ということを、自分の中で思いが出てきたようでした。私達はこのように針生コミュニケーションズさんから多くの情報をいただいて、子ども達の実態に合わせて授業を創ってきました。具体的には授業のスタイルを変えたり、子ども達の反省カードを見て、足りないところを再度補って授業をしたり、子ども達により良いものを与えることを第一にして取り組んできました。学校と会社の方、両方の持ち寄る力と良いところを合わせながら、「子ども一人一人により良い学びの場所を。」これを目指して、これからも取り組んでいこうと思っています。黒松小学校の3時間目から6時間目の授業の様子でした。これで終わります。ありがとうございました。

野澤令照 大変ありがとうございました。黒松小におけるキャリア教育の取り組みということで、映像をもとに発表をさせていただきました。子ども達の反応につきましては、今、圭先生の説明の中でいろいろ出てきたのではないかと思います。実際に子ども達の指導に当たりました先生方に、プログラムを作られたスタッフの方々との話し合いも含めて、感じられた事をご紹介していただきたいと思っています。パネラーで登壇をいただいている本木さんのほうから、その辺の所を少し話していただけないでしょうか。

本木り糸 今映像を見ていただいて子ども達の様子とか、圭先生のお話を聞いていただいたと思うんですけど、実際このプログラムをやっていくに当たって、私達にとっては、もともと5年生のときに数時間関わらせていただいている部分あるんですけど、6年生になってからは、未知の部分もたくさんありましたので、相当疑問の点とか分からない部分を針生さんのほうにお聞きしたりしながら、考えてきました。

もともと6年生としての総合の時間に生き方を考えるという自分達のコンセプトがありましたから、そこに何とか繋げていけないかという事で、担任同士頭をくっつけて話し合ってみたような次第なんですね。その時に一番すり合わせるのが難しいなと思ったところが、皆さんのお手元に黒松小の年間プログラムという形で、キャリア教育のスケジュールを載せていただいているんですけど、これは針生さんからご提示いただいた物ですが、これに対して自分達の目指している子ども達の姿が、本当にこのプログラムでやっていけるのだろうかという事を、うんとうんと考えました。今も考え続けています。それは1時間ごとに考えていかなくはいけないものなんじゃないかということ、私達は常々思いながらやっています。

でも、このプログラムというものを提示していただいたという事は、私達にとってはものすごく大きな視野を持つ一つのきっかけになっているんですね。今、第3回までのビデオを見てもらったんですけども、フリーターと正社員の体験談という事で、本物のフリーターを連れてきていただく、本物の元フリーターを連れてきていただくなんて事は、私達にとってはなかなか難し

いことです。本当に連れて来てもらったとしても、実際に子どもに向かって話をしてもらう、そういう事ができそうでできない。そういう点で、それを実現してもらえたという事がものすごく有り難かったというのが一つあります。

それから、ただ、子ども達に対するとき、どんな人であっても、ファシリテーターさんであってもフリーターさんであっても、子ども達にとっては誰でも「先生」という形で接しさせたいと考えておりますので、そういう意味でのつながりをちゃんと持つように、針生さんとの交渉をしているというところがあります。今、映像で見ると出来上がっているような感じがするのですが、本当にプログラム途中の子ども達の姿です。その子ども達の反応を見ながらやっていくという事で、プログラムを骨格として私達がいろいろそこに肉付けしている部分があるということで、そこが魅力なのかなあって、このごろ思うようになりました。今のところはそういう段階です。

野澤令照 ありがとうございます。最後に「このごろ思うようになって来ました。」というところ、非常に含みのある言葉だと思うのですが、その辺のところ、ちゃんと耳の中に残しておきながら、お話を聞いていただければなと思います。

同じくご指導いただいた6年精の先生方いらっしゃると思いますので、今野先生、阿部先生、何かございましたら一言で結構ですけど、よろしいですか？すみません、プログラムに無い振り方をしていますので、慌ててらっしゃるかもしれません。マイクをちょっと・・・。

今野道子 今、本木先生のほうから話しあったとおりなんですけど、私達の総合のテーマで、修学旅行でいろんな人たちの生き方について調べてきました。子ども達はいろんなこと感じてきたんですけど、それをもとに今のキャリア教育とかみ合わせて進めています。お手元にキャリア教育のプログラムあるんですけども、この黒塗りの部分を私達はこれとおりでなくて、もう少し身近な、自分の身近な人たちの生き方のほうに進めて行ければなあというふうに、今考えているところです。

家族の仕事のことを調べたりというふうに、今活動が進んでいるんですけど、針生さんに示していただいたものを基に、子どもの実情、子どもが抱えている背景、それから地域の様子。そういうのでどんどん変えていければなと思っているところです。

野澤令照 提示いただいたプログラム、そして一緒に進めているプログラム。それを先生方が受け止める中で、目の前にいる子ども達の姿に応じた形で、いろんなものをその中に取り込んでいく。その中でももちろん話し合いをしながら、今作っている段階だという説明がありましたが、この辺についてプログラムを開発した方の立場で、今の先生方のお話を受けて菊地さんからお話をいただければと思いますがいかがでしょうか。

菊地淳 最初になぜ民間の企業がこういう分野に足を突っ込んでしまったかということからスタートしないと、理解いただけない部分もあるのかなと思ひまして、そこからちょっとお話ししたいと思います。教育の分野に足を突っ込んだのは10年前、10周年ということで融合研さんからもありましたが、教育長さんのおっしゃっていた、「鳥もちにひっかかった」という話もありましたが、その時期というのが、子どもが社会教育、生涯学習と出会った時期だったのです。

それまでは企業というものは、社会教育というものとはまったく無縁のものです。私自身、生涯学習と聞いたときに一生涯じゃないほうの「障害」を頭の中で思い浮かべたくらいです。それだけ企業の風土から排除されている、触れてはいけない分野だったのかもしれませんが。ビジネス、営業をしていくには、やってはいけない一つ。それを商売にしていらっしゃる方は別なんです。

そういうことで、仙台メディアテークが立ち上がっていく過程でいろんなお手伝いをさせていただくという機会を与えていただきまして、その中で生涯学習ボランティアの皆さんのお手伝いを、たとえば私達印刷会社ですから、情報系のいろんな処理、コンテンツを作ったりするんですけど、生涯学習をされている皆さんのやっている、たとえば折り紙ボランティアの方とか、絵を描く方とか、お話をする方とか、いろんなそれぞれの活動があるんですけど、そういった活動を、たとえばコラボレーション、併せていく時にどんな展開があるんだろうという事が実はお手伝いしながら感じたところです。

そういった物を合わせていくと、それを電子媒体でたとえばスライドのように映していくと、電子紙芝居みたいなのができて、その背景にある絵を書く人と、登場人物は折り紙であったり、それをお話してくれる人がお話ボランティアさんだったり、ということ。そういう出会いの場とか展開する場というのを、一時的なお祭りなんですけどご提供する。

そんなアイデアを形にしてみようみたいな事でやっていったんですが、そうするとお祭りだけで終わらないというのがだんだん見えてきたんですね。それぞれの市民センターがありますが、その所属する市民センターに入っていくと、そこでお祭りで出会った人たちが行き来し合ってたんですね。そうやって広がっていくもんなだと、初めて生涯学習とか社会教育の端っこに触れた事が衝撃的でした。

見たこと無いもの見たぞという面白さがありました。その辺りはこわごわやっていたんですね。常に何か新しいことする時は、ほんとにつま先からそーっと入って行って地面に足をつくような感じで。またそういう分野のボランティアさん達からも、なんで業者がここにいるんだと言われ続けて3年ぐらいいました。つらいなあと思いながら、でもこのあとに何が来るんだろうと思いつながら。そんな事をしながら、社会教育について10年間というのが一つあります。

もう一つあって、ちょうど同じ時期にインターンシップ、今はもう一般的に言われていますが、インターンシップの受け入れをするようになりました。で、大学と高校専門学校から、どちらかと言うと当時は職場体験とかいろいろなスタンスのインターンだったんですが、そういう人が入ってきて。最初は体験だけの受け入れをしていました。

ところが、だんだん最近、年が経つにつれて打たれ弱い学生というか、多くなってきたんですね。実は、最初は就職活動が終わったあとに来る子どもというのがすごく多かったんです。行き先が決まっていて、何かこなさなきゃいけないようなものが与えられているようで、義務的に過ごすというのがあったのですが。次にその消化型のインターンシップの次に出てきたのが、目的は持っているんですが、うちの仕事と、用意したプログラムとイメージが合わないとななくなっちゃうんです。何だこれはとこちらは思うんですが、来ていて来なくなるっていうのはまだいいんですが、マッチングして、直前に、二日前ぐらいになると、「ちょっと行けません。」というものが出たりする。それが10人いれば二人三人というふうにだんだん増えてくるというのが4-5年前ぐらいです。

大変だな。このまんまで行くと企業に入ってくる人材にまで響いて来るんだろうなというところで、いろんなことを考えながらやっていたんですが。その中で3年前、「インターンシップ虎の穴」というのを我々民間異業種3社で考えまして、プロジェクト型インターンシップというものの、3ヶ月かけてやったものがあります。ある大きなイベントの中で、印刷物だったり、ホームページだったり、映像だったりというのを、それぞれプロジェクトに分けて、4つの学校の学生さんにプロジェクトに参加してもらってプロと一緒に、まったくプロと同じような仕事を自力でやっていくというものだったのですが。それをやった結果、非常に成果が大きく出たんですね。

出たんですが我々のほうが持たない。一回のイベントは良かったんですが、これ毎年やったらもたない。どうしたらいいんだろうと思っていたんですね。で、そのインターンシップ虎の穴の発表会にいらっしゃっていたのが、隣に居られる三瓶さんで、三瓶さんから「来年度からキャリア教育のスキームが経産省から出ます。」というお話をいただいて、これはもしかすると、もっとそれ以前、高校、中学とさかのぼっていく必要があるんじゃないかという一つのきっかけをそこで得ることが出来たと言うことです。

うちの会社の大きな目標の一つに、「地域との融合」、「地域の中で必要とされる会社になる」というのがありまして、その為にやっていかなければならない事の一つとしては、儲けを度外視するという事は厳しい話なんですけど、先ほどの利益ということではなくて、人を育てていい人材に自分の会社に入って来てもらうために、長い時間をかけて、長いスパンでやっていくというプロジェクトが必要じゃないかというふう考えて、今に至っているという事です。内容はまたあとで。

野澤令照 ありがとうございます。冒頭、先生方が取り組んでいるキャリア教育。その直接的な感想という風なところから話が入ってきたわけですが、その中で今回支援者である菊地さんを始めとする皆さんとの話し合い。その実際面についてという風なところに話を進めようと思ったのですが、それは次の段階にちょっと置かせていただきたいと思います。

と申しますのは、今、菊地さんから大変ポイントになるお話をいただきました。つまり、なぜこのような取り組みを始めたのかと言う、今のご説明で理解いただけたいと思いますが、その中でやはり、人材を自分達のところで、たとえば会社であるとか社会であるとか、それを支える人材をという視点から取り組み始めたというご説明がありましたが、この辺になりますと、隣にい

らっしゃる東北経済産業局の三瓶さんから、経産省として、国としてどのような考えでいるのかという事を、ご説明いただければと思います。よろしいでしょうか。

三瓶綾子 それではお手元に経済産業省の人材施策としている資料があると思いますが、ここにありますように、若者自立挑戦戦略会議というのが、官房長官、経産大臣、文部科学大臣、厚生省、経済再生担当大臣と、5省で構成されているこの会議の中で総合的な人材施策を推進していきましょうという事が国の方針で決まっています。裏返していただいて4頁になるんですが、平成16年12月に若者の自立醸成のためのアクションプランというのをこの会議で決めました。それが1、2、3、4、5となっております。

この時期、フリーター、ニートが多数、突然現れたわけではないんですが、その存在が顕著になってきた事から、何とかしていこうという事を政府レベルで考えたという時期でして、その時にキャリア教育を推進しましょうという事が5省の中で決まったという事が国の背景にあります。

それでキャリア教育については経済産業省、厚生労働省、文部科学省でやっていきましょうという事で、4頁目から3頁目に戻るといふふうになっていくんですけども、キャリア教育プロジェクトの詳細については先ほど針生社長の方からご説明がありましたので、皆さん斜めにでも読んでいただければいいんですけども。

国の予算というのはマクロなアプローチでして、人材といいましょうか、少子高齢化の中で国力をキープするには、一人一人の国民生産性をキープするか、上げていかなければならないと言う様な、そういったマクロなアプローチというのは、国の予算はあるんですけど、先ほど菊地部長もおっしゃったように、教育委員会に「こんにちは、経済産業省です。新しい予算つきましたから使ってください。」と言っても、「経済産業省、何ですか？」って言われちゃうのが。

言われぬようにこちらも何とか勉強しながら、先生方のお話いろいろ伺ってですね、子ども達にどういう力をつけるとか、評価をどうつけるかというミクロなアプローチと一緒に考えていただきました。ご協力いただいた先生方ですとか、教育委員会、皆さんに本当に感謝しているところです。

学校の取り組みというのも経済産業省がいろんな予算をつけているところなんですけど、たとえば上のほう、まだ継続中の予算もあるんですけど、たとえば起業化教育促進事業として、だいたい今年度で終わりになってくる事業もあるんですけども、昨日、起業教育のちょっと大き目のイベントがメディアテークであったんですけども、これはもう、国の予算以降も先生方一人一人の自力ですとか、定着を図る上で非常な協力をいただきまして、現場の先生には本当に感謝しているというのが私達の率直な気持ちです。

全国29件中東北から3件出てまして、今日、会場には盛岡で授業やっていらしている方がいらしているんですけど、東北ではキャリア教育については仙台と岩手県と秋田県大館でやっている事業が3本走っているんですけど、その3本が3本とも自立化融合というところを選んでいただきまして、ありがたいと思いながら、予算が増えないかなと思っているところなんです。

もちろん自分達の自戒を込めて言っていることなんですけれども、人材育成というものは10年20年かかるものなんだと思うのです。評価されるのにどういう評価があるかも分からないし、効果がでるのはもしかしたら50年先かも知れないという事なんですけど、最近の予算の取り方は3年で自立しなさいという予算の取り方になっています。とてもそれは荒っぽいというのは私達承知しています。ただ、予算が終わればそれまでという関わりでなく、何とかいろんなアプローチから支援なり何なりしていければなと思っています。国の予算の仕組みと我々のちょっとした思いを説明させていただきました。

野澤令照 ありがとうございます。今、経産省ということ、それから各省庁の連携ということで、国の施策としてどのような取り組みをしているかということ、三瓶さんからご紹介をいただきました。

教育の立場から見れば、教育には連綿とした不易、時代が変わろうとも変わらない取り組みというものが当然ございます。ただ、それだけではなく、時代に応じた教育というものも求められるという事があるんだと思います。まさしく今説明をいただいたものは、今、国の現状から教育に求められている、そういう時代に応じた教育ということでないかと思えるのでございますけれども、実は今日、登壇いただいている宮崎会長、現職はは千葉の小学校の校長先生ということでもございます。ここで宮崎さんにちょっとお伺いをしますが、国として全体として必ずやらなけ

ればならない取り組みというものが教育の場に求められているということが、今のお話でご理解いただけたと思うんですが、教育の場にあるお立場として、その辺の宮崎先生のお考えをお聞かせ願えればと思います。よろしくをお願いします。

宮崎稔 校長なんですね。実際にね。キャリア教育というのが出てきたときに、うちのほうの学校の職員、何の実感も持って無かったですね。今三瓶さんが感じている経済産業省が感じているような実感、それから1999年には経済同友会が131社に人材についてのアンケートをとったりしたのがあるんですけども、経済界の危機として感じている人材についての考え方、学校教育の先生達には、そういう危機感を共有できるような実感は先ず無い。ゼロに等しいと僕は言っているかなと思います。先ほどビデオに出てきた東六番町小学校に、6月15日僕は授業を見に行っただすね。千葉県の日だったんで、休みだったんで見に行っただす。それを聞いて、資料もらってきて、うちの学校でもどうだと、うちの職員に投げかけたら、4ヶ月ぐらい経つんですけど誰一人取り掛かっていません。こんなあたりが学校の実態かなと思うんですね。そういったところを、どういうふうの実感のあるものにして行くかというところが、一つ大きなものになるのかなと思います。

さっき針生さんが双方向のものを生み出していかなければいけないと言っていましたので、ちょっと耳が痛いぐらいの本音の部分のところをいくつか話します。学校現場というのは何々教育というのがいろいろ持ち込まれてくるんですね。やれ国際教育、やれ福祉教育、やれ何々教育。そのたびにミクロのどうのこうので先生方に感謝していますって言っているけど、本音を言うとありがた迷惑だったかもしれません。あれもやんなきゃなんない、これもやんなきゃなんない、ただでさえ忙しい、いろんな問題がある、保護者の問題がある。なんで経済界の問題まで学校に持ち込まれてくるの？そういうようなところが多分、学校の中にはあるんじゃないかと思います。

それで今、文科大臣が変わって、小学校の英語教育いらないよってなことが・・・そうすると、今まで英語教育やるんじゃないかということで、それなりに下準備等してきた学校が、「なんかいいみたいね・・・」という感じで、急にトーンダウンしていく。

キャリア教育、キャリア教育っていうけど、就職率が上がってきていますよね。イザナギ景気に並んだってなってくる。そういう風になってくると、経済産業省だって、もしかしたら「就職口いっぱいあります。だからキャリア教育いらないです。ニートなんてやってられません。みんな正社員でやらないと間に合わなくなってくるんで。」って、そういう時代になったら、アレは何だったんだろうかと言うくらいになってくるかもしれないです。

これは何かというと、教育現場は国の施策の下僕じゃない。教育現場に主体性がないと、国の施策で右往左往する事になってしまうんじゃないかなと思うんですね。仙台市が自分づくり教育という形でこれを考えていることは、すごく見識があることだと思うんです。自分づくり教育といつつ、実は職業教育やっているんだよという、ただ名前を変えているだけだっていう、そういう教育をしてはだめなんだと思う。経済界がどれだけ就職口が出てこようと、やっぱり自分づくり教育は、子どもの教育にとって必要なんだということを教師自身がどれだけ実感するものを持っているか。大人の生き様の中から、「僕もああいう大人になってみたいんだ。」「夢を持って生きてみたいんだ。」。そういうような自分を創っていきたくするような教育で、いかに試行して昇華させていくかという、そういう教育をしていかないと、一般的にやられているものは、ただ「職業体験をしなければなんない、どっかで職場体験をしなければなんない、地域の人を呼んで職業についてやるんだってさ。」そんな程度のものであれば、学校現場はすごく嫌がるものだと思います。

最後にしますけども、そういう意味で学校現場には、「なんで企業とやらなければならないの？」というところで、非常に大きな壁があります。企業とやることの意味がまだまだこなれていない部分があるので、その辺は学校独自に、学校として、先生だけが、まるで学びの聖域みたいにやっていく事ではない。地域の人や普通の大人の人が入って来られる授業の意味、そこに経済活動をやっている人も入ってくる意味。そういったものもこれからはやっていかないと、なかなか受け入れにくいものがあるかなというような気がするんですが。

学社融合 キャリア教育報告

野澤令照 今、教育界にいる立場ということで宮崎さんからお話をいただいたんですが、冒頭、この取り組みに関わりました本木先生の言葉の中にも、今の言葉につながるものがあるのだと思

います。そこのところに少し戻ってみたいと思いますが、本木先生、今の宮崎さんのお話を聞いていただきながらですね、やりながら、じっくり来ないとか、ちょっとこの辺は苦しいとか、多分あったと思うんですが、その辺を、今の言葉を受けて何かちょっとお話いただけますか。

本木り糸 宮崎先生の、本当に、校長先生としてそんなこと言っているのっていい感じでは聞いてたんですけど、私達は申し訳ないんですがキャリア教育っていうものを、キャリア教育ということで受け取ってないというところがあります。キャリア教育の何たるかということは本当にまだまだ暗中模索で、私達にとっては今日の前にいる子ども達の心の成長をどう助けていくかということで精一杯というところがあります。

ですからこの学校の総合的学習の時間の目標ということ、さっき今野先生からお話がありましたけれども、人と出会って自分の夢を育てていく、そういう自分を創っていくいき方、そういうことをする時に「こういうプログラムがあるんだって」って言うことで紹介されたのが、正直、きっかけではあるんですね。出会いのきっかけというのはそういうものです。

でも、紹介されたからそのまま鵜呑みにしたというのではなかったのです。針生さんとか、隣に座っていらっしゃる菊地さんには、本当に耳の痛くなるようなことを何度も何度もぶつけてですね、まだこれからもぶつけることになるのかなと思うんですけども、プログラムの一つ一つを見ると、子どもの実態にそぐわない部分はどうしても出てくる。「これは何とかならないでしょうか？」というようなことをお話したことは何回かございます。

ただ、菊地さんとか針生さんのお話を聞くにつけ、私は自分で思っていることなんですけど、プログラム自体というのは、やっぱり先ほどお話したように骨組みなんです。その骨組みに対して、子どもの実態を一番良く知っている私達が、どれだけ子どもの中身に、成長できるかということを考えて、そのプログラムをてこ入れしていくというか、実態に合いやすいものにしていくかということが、私達の仕事なんじゃないかなと思っているんです。骨組みということを考えた場合には、この骨組みをつくるだけでも現場ではとても大変なことなので、その骨組みを作っていたということ、それを利用できるということだけでも、私達にとっては非常にありがたいことかなというふうに思っています。

たとえば事例を言いますと、フリーターを考えるとというのがさっき映像で出てきましたけれども、仕事のことを考えて、そのあとにフリーターを考えるとというのが出てくるんですね。でも、それをただ淡々とファシリテーターの方にやっていただいて、ただ振り返りをしたというだけでは、子どもの心の中に入って来ないんですね。ここまで言っているのか・・・。(どんどん言ってください・・・)

お仕事についてブレインストーミングと言ってカードでいろいろ見てみて、いろいろ感じてみて、いろんな仕事があるんだな、こんなふうに分けることも出来るんだなあとすることは、実感としては感じます。でも、そのときに「アルバイトはどうなんだ？」って言う子がいましたが、もしその子の咳きを拾わなければ、フリーターの仕事のこと突然持っていくことはできないんです。

現場の子ども達、特に今の6年生の子ども達は、非常に素直でとっても可愛い子たちなんです。とっても可愛くて「本当に6年生なの？」って思えるくらい可愛い子達なんです。そういう子ども達がイメージとしてぷらぷらしているようなフリーター、なんか、仕事してるっていうふうに思っていない子達もたくさんいるんです。最初はフリーターとニートの区別もつかない。そういうところから「フリーターって何？」っていうふうに入っていくんですから、もしかしたら意識の中にフリーターがどうこうって言うのが無かったかもしれないですね。

仕事をするって言うのはお父さんやお母さんのように「ちゃんと働いて、給料もらって、家族を養って。」って言う感覚なんですね。そういう素直な子たちだったんで、そこへ持っていくときの、「どうやって持ってたらいいの？」っていうのが一つありますね。それでブレインストーミングするときに、いろんな条件の素を与えるってことで、たくさんの条件を言って、「この場合にはどういうことだと思う？」「70歳にできる仕事とできない仕事」「資格が要る仕事と資格が要らない仕事。」いろいろ出していく中で、「子ども達の考えがたくさん出てくるって言う方向性を探っていくしかないんだね。」って言うことに考えつきました。

ただ、針生さんはそれをちゃんと分かって、今までの実践から「こういうふうになればいいんですよ。」って言うのがあったんですね。でも、私達がそれについていくまでもだいぶ時間が

かかって、やっていく中でも時間がかかって。

もう一つはこの後に、第 8 回目からの授業ということで、先ほど東六小学校さんの映像に出ていたビッグイシューを考えるとというのがありますが、そこへ持っていくときも、私達は非常に戸惑いを覚えたんです。「なんで地域のお仕事を知ろうというところから、突然ビッグイシューに行っちゃうの?」と。私達も子どもと同じ目線で考えようと思うと、子どもと同じ考え方になってきてしまうものですから、どうしてそういう風になるのってことに、とても飛躍があると感じますね。

ただ、子どもと地域のことを調べたり、修学旅行で子ども達が「楽しかった。」「こんなことが解った。」と感じてきたことを整理したときに、見えてきたことがあるんですね。修学旅行では山形に行って作業体験とか、いろいろな人たちの職業について調べてきたのですが、そのときには直に山形の人たちと触れ合ってきたんですね。そのとき肌で感じたのが、自分たちの地元をしっかりと支えていこうという気持ちとか、地元を愛している気持ちとかをうーんと感じてきた。それで「仕事ってお金だけじゃない。」ってことを感じてきた子どもたちがいるっていうことに気づいたんですね。「あー、これだ。」と感じましたね。

親御さんがやっている仕事も、私たちがやっている仕事も、究極はお金を得るためにはしてるんですけども、そのためだけではない。いろんな仕事がある。そこにつなげていくために、ちょっとプログラムの上に私達のフォローを加えて、ビッグイシューにつなげていけるんじゃないか。そういうことを考えています。いろんな意味で骨格、プログラムは骨格だと思っていて、そこに肉付けするというのを主眼に置いて、今、学習を進めています。

いろんな立場の人がいらっしゃると思いますし、いろんな考えの人がいらっしゃると思うんですけど、私たちの目の前には生き物である子ども達がいるから、その子ども達の反応を見て動くということ、それと、子ども達がどんな姿になったらいいのかなということを考える上での悩みというのがすごくあります。

野澤令照 ありがとうございます。プログラムを取り入れることによって、そして目の前にいる自分達が預かっている子ども達に対して教育を進めていく時というふうなことで。今の話を聞いていく中で、とても前向きに取り組んでいるという事は分かっていたんだと思いますが、でもその中にやはり、プログラムを開発された方々の考え方との違い。これは教育現場にいるものと、実業界にいてそういうふうなプログラムを開発された方々との立場の違い、これは当然のことであると思うんですが、現場の先生方の声を聞いて、開発者として菊地さんのお立場でお感じになられている事をお話いただけないでしょうか。

菊地淳 実際にさっきお話したこと、私たち自身が自分の地域の中で仕事をしていなくて、子ども達の周りから仕事が見えなくなっている状況の中で、地域の中の学校と言うことで入ってきているわけですけど、実際に今やっている学校では先生方のご協力をいただいて、いろいろなご意見をいただけるので、我々のプログラム自体すごく鍛えられていくなと実感湧くんですけど、先生方の負荷と同様に、我々側のほうも通常の一般的な仕事に比べると何倍も時間が費やされる。当然教育については素人なもんですから、学校の中を知らない。現場の裏側を分かりませんので、そういったところに入ってお話しをしていくというのは、やっぱり精神的な負担というのも最初、大きいんですけど。ただ、実際に始まってしまうと、先ほど圭先生のお話もありましたけど、実は先生方の思いと、私達が思っている子どもを育てていきたい、あるいは先生の課程を支援したいというところから人材への結びつきって言うのがあるんですけど、そこに向いている思いというのは同じなのかな。同じ方向を向いているというのがどっかで摺り合せが出来てくると、どんどんどんどん我々の側の子ども達のディスカッション、現場の先生達と我々側のプレストというのがだんだん深まっていくという実感があって。そこに多くの時間をかけるというのは、忙しい中で大変だと思うんですけど、そこがものすごく重要なとこなんだなというふうに、今感じているところです。本音が言えるようになるまでというのに時間がかかるんですけど、そこに到達した時というのは、もうまったく新しい協働のスタイルというのが出来上がってくるんだなという実感はすごくあります。

野澤令照 ありがとうございます。やはり学校には学校の、開発者、あるいは一般の社会、経済界の方々にはその方々の立場。それぞれにやはり、お互いにたくさん時間を必要とするという部分が非常にあるんだろうということは、分かっていたんじゃないかと思います。

産みの苦しみというのでしょうか、産みだすまでに多くの時間をかけた。よく学校の教員は忙しい、忙しいと言いますが、でも民間の方々に言わせると、ここではおっしゃいませんけれども、一般の人たちだって忙しいんだよというふうなこと。つまり、忙しいという言葉で片付けられるかということ、そうでは実は無いところがある。だからと言って、先ほど宮崎さんがおっしゃったように、何でもかんでも学校教育かということ、それではパンクをしてしまうと言う事があるんだろうと思います。

そうするとですね、本当にこうやって新しいものを産みだすためには、かなり時間がかかる。そしてそれぞれの熱意が無ければ実現し得ない。でもそこに取り組み始めた先生達がいる。そしてそれを支援している立場の方々がいる。なぜそんなに力をかけて時間をかけてまでやろうとしているのかという事になると思うんですが、この辺はやはり先ほど宮崎さんの言葉にありました「教育の目指すもの」と「このプログラムが目指すもの」と、その辺のところの一つ大きなポイントがあるのかなと思うんですけど、そこを宮崎先生、ちょっとだけ補足をお願いしてよろしいでしょうか。

宮崎 稔 先生方さっき、地域の人が入って来る事について嫌がることについてと言う事でちょっとお話ししたんですけど、これ、とっても意義がある事なんで。今、野澤さんが言ったように、すごく産みの苦しみを味わっている時であるし、この仙台モデルが完璧だなんて誰も思っていない訳なので、ほんとに本音でもって創っていかなければならないなと言う事をすごく感じるんですが。それで目指す所という辺りなんですけどね。

私、職業教育が先にありき、あるいはプログラムが先にありきという事じゃなくて、黒松の先生がやってらっしゃったように、子どもを見ながら、そして学びとして成立させていく。学びというのは、自分で「こんなこと勉強したいな。」「この本調べてみたいな。」という主体性を持つ子どもを育てる、そういう事にこの教育はすごく向いている事だろうなと思うんですね。結果として、「だから僕はこの職業につく。」ということの意義や喜びを感じられている。そういう道筋を誤らないようにしなければなんないだろうなと思っているんです。

野澤さんの質問とちょっと違っちゃって申し訳ないんですけど、先にどんな職業に就かせようと言う事じゃなくて、自分で学んでいくことの喜びを感じさせる、そこら辺を、それも目的なんだというところを考えてやって行きたいんですけども。

じゃあ、その中で自分づくりをする教育っていうのは、どんな自分をつくる事なんだろうか、その辺はこのプログラムの中にどれだけきめ細かく語られているのか。私は人として生きていける自分、要するに人間らしく生きていける強さ、そういう強さを持った自分。これは地域の単位のようなものと組んでもいいかもしれませぬ。同時にみんなと生きていけるやさしさ。そういう両面を持っている自分。そういう自分をつくっていくことじゃないかなと思うんです。

その基本になっていくためには、私はキーワードは、さっき針生さんも言ったかもしれないんだけど、自信。生きていける自信。そこのところを最終的な一番の目的としていく。算数が出来るようになった、体も丈夫になった。友達に優しくなったということを通して、「俺って捨てたもんじゃないな。」「僕もがんばってみると結構いいところあるな。」っていうふうな、自分自身に生きていけるような自信をつけられるような場にしていく。それが自分づくりだと思うんですね。

もう一つ言うと、今学校に来ている子ども達、来れば来るほどだんだん自信をなくしていくんですよね。友達と比較され、勉強面などで比較され、先生は通知表をつけるから、普段は「いい子ね、あんたやしいね。」とか言ってるけど、結局、「何々は良く出来ませぬ。」って付けざるを得なかったりしたりする。

自分づくり教育を地域の人たちと一緒にやっていくこのことの意義。「なんだ、僕ってやれるんだぞ!」さっき4つ言ってましたよね。「自分の考えがまとめられる。」とか、「発表が上手くなってきた。」とか、自分自身が変わっていく自分に目覚めていけるようにしていける。その辺のところを、丁寧にやっていくことが自分づくり教育に行くのかなと思うんですけどもね。

野澤 令照 ありがとうございます。今、宮崎さんから「自分づくり教育」。仙台市教委として推奨している取り組みということではあるんですが、この辺、経産省あるいは東北経済産業局のお立場で、今のこれまでのお話を聞いていただいて、三瓶さんがどのようにお感じになられたということ、ちょっと感想で結構ですのでお聞かせいただければ。

三瓶 綾子 今率直に感じていることを言わせていただくと、宮崎先生には怒られちゃうかもしれ

ないかもしれないんですけど、理科実験教室プロジェクトというのが、来年から新政策で、理科実験を、産業界でしたり OB 人材という人がお手伝いをしていきたいと思いますというプロジェクトなんです。どんなコンテンツがあるかというような事で、いろいろ理科実験を手伝うという事で学校現場に入っているとヒアリングをしているところなんですけれど。やっぱり本業ではないんですよ。役所の人間なり・・・、学校の教員でもない、子どもでもないという人が学校に入ってくるということは、誰が入っても本業ではないんです。で、本業ではないと言う事はどういう事かという、継続的にニーズに応えた提供が出来ないという事なんですよ。今、非常に好評なんです。理科実験が入っている学校については、ただ、オーダーが多すぎて供給が追いつかないということで、マスがどうやっても埋まらないんです。

それから、教えるスキルというのも先生ならではのテクニックがあるので、ド素人が「こんにちは」と教室に行って、注目して下さいと言うテクニック、やっぱり先生にはかなわない。プロならではのテクニックがあってかなわないというのがあって、やっぱり教育の主役というのは子どもであり、教室に毎日いらっしゃっている先生方、それ以外ありえないというのは、我々肝に銘じています。ただその、理科実験が外から入ることが大変好評だということ、それから逆に外で協働して、大学生なんですけど、今我々の職場にも大学生を受け入れているんですけども、我々が現場で生徒さん達をお預かりして、インターンシップなんで、お手伝いでないんで、教育をしていかなければならないというところの難しさみたいなものあるんで。もちろんその主役である教員の方と生徒の方から、どう我々外の間が協働していくか、双方負担感が増えてはいけないので、負担感を減らしながら協働していくということを考えなければいけないあと、今、いろんな政策を進めながら思っているところです。

素人ならではの話で、また怒られるかもしれないんですけど、こんな感想を持っています。

野澤令照 ありがとうございます。今パネラーの方々の中から、自分づくりという言葉がたくさん出てきています。今日はキャリア教育というテーマで話をしていたところですけども、実際に取り組んでいる先生方の、自分達のカリキュラムの中に活かしこむとか、様々なこと取り組みということを考えて来ると、キャリア教育と言われてるそのものだけではなくて、もっと違った、あるいはもっと深い意義と言いましょか、その辺のところに触れてくるところがあるのかなと感じたところでございます。

あとで私がしかられるのは覚悟の上で、実は教育委員からたくさんの先生方がおいでいただいております。特に、自分づくり教育を推進されていらっしゃる庄子教育指導課長様がおいでですので、ここで今までの話などを受けまして、一言感想などを聞かせていただければありがたいのですが、よろしくどうぞお願いいたします。

庄子教育指導課長 今日は来賓席に座っていただければいいからと騙されて参りまして、野澤校長先生がコーディネーターと判ったときはちょっと嫌な予感してたんですけど・・・(笑い)。いろいろ皆さんのお話を聞かせていただいて、いい勉強になりました。

自分づくり教育というのを仙台市独自で策定したわけでありまして、裏側には進路指導、出口指導、中学3年でどうする、高校3年でどうすると、そういった事ではなくて小学校のころから、勤労観、職業観等の、たとえば自分の係り活動の役割を自覚しましょう、仲良くしましょう。そういった事からやっていきましょう。その全体構想図というのを見ていただければわかるんですけども、小学校のころから身につけさせたい。一貫した考え方の下で力をつけていきたいと考えておりまして、文科省の方ではキャリア教育、今日もキャリア教育ですけども、先ほど三瓶さんのほうからお話しありましたが、起業家教育というプランもありまして、昨日仙台市で先進的な取り組みをしている太白小学校が、ここにいらっしゃっている白井先生が素晴らしい発表をなさいましたが、そういった形でも自分づくり。材料が商品開発という一つのメソッド、方法なんですけど、作って、売ってという形。それからまたキャリア教育の針生さんのモデルは仕事というところに焦点を当てた、そういったことでやり方に違いはあるんですけど、そういったところで子ども達を育てていきたい。

その中で結局、キャリア教育と言うと何かこう、キャリア組というような誤解をされやすい。起業教育といいますと、ホリエモンを育てるのかといった誤解も生まれる。そうじゃなくて、何で例えばフリーターとかそういった問題に現場が取り組まなければならないかと言う事もあります。そうじゃなくて、先ほど本木先生、とってもいいお話していただきました。「子ども達を将

来どういう風にしたいんだ？」っていうのは、現場の先生がみんな熱い思いを持っています。

そういった先生方に、「こういう方法もありますよ。」「山に登るのにいろんな道がありますよ。」「こういう登山道を開発しましたよ。」と、いろんな道を提供していただく。これは大変ありがたいなと思っています。その登山道、与えられるというのじゃなくて、自分達でその登山道をさらに整備したり、自分の学校の子も達に会うように開発していったり、この中で先生方も力をつけていくという事があるのかなというふうに思って聞いておりました。

実は、中学校の2年生に5日間の職場体験活動をしなさいと文科省から言われておりました。それを探すというのは大変な苦労を伴うところがあります。受け入れる方だっているいろいろあります。そういった中で、「やらなければならないのか？」先ほど宮崎さんもおっしゃいましたが、学校、いろんなことがある。情報教育、環境教育、あれやれこれやれ、あの話に来たとき、『ここにいる先生方、たぶん指導課のこと頭に入れてるんだろうな。』そのほかに情報管理はちゃんとやれ、パソコン持ち出すときはこうやれ。もういろんなことを言っています。説明責任を果たせとか、拳句の果てに基礎学力上げろとか。うるさいうるさい。本当にうるさいと思われているのが私達指導課だと思っています。その中でまたこれもやんなきゃいけないのかと言われてたら本当に現場はつらいと思います。

で、その中で、そういう事じゃなくてこういう事だったら自分の目の前の子ども達がこういう風になるぞ。これは使えるな。こういったことを是非、いろんな先生方に気づいていただき、紹介していただき、取り組んでいただければなと思います。

野澤令照 突然お願いしたにも関わらず、お話しいただき、ありがとうございました。

今、庄子課長に大変わかりやすくお話をいただけたとと思いますが、これまでの話の中で、プログラムとしてキャリア教育がありました。それから今言葉が出ましたが、起業教育というのがございました。

しかし、そのものだけをそのままの形で教育の現場にというのは、教育の場にあるものとして子ども達に対する責任、保護者に対する責任という意味からも、受け入れがたい。

しかし、一つ見方を変えて「自分づくり」という提案がございましたけれども、そういう風なところで取り組むのであれば、いろんな可能性が見えて来るのではないかと。まさしく本校の本木先生の話にありましたけれども、あの産みの苦しみは、実はそういう取り組みをやっていけば故の事なのかなあとと思います。ここで、このような価値ある取り組み、プログラムを提供いただいたんですが、これを学校現場の中で、教育の場で、そして社会の中でしっかりした取り組みをしていくためにという視点で、皆さんから少しずつ御意見をいただければなあと思うわけでございますけれど、宮崎さんいかがでしょう。

宮崎稔 学校で受け入れるだけだったら、いくら良いものであってもだめなんですからね。そういう意味では、言いにくいこともお互い言い合ったということで、より良いものを創っていくことが大事だと思います。せっかく生まれました。生まれたんだから、いいものに育てていく必要があるんだと思います。

そういう意味で僕は、学校で先生方が取り入れたいような授業構成をする意味での、ネックになっていることが意外とあるのが、授業そのものの時に、先生方はまずいことに遠慮しています。「せっかく来ていただいたのに」「お忙しいのに来ていただいたのに」「地域の人が給料ももらっていないのに来ていただいているのに」「私の授業のために来てもらっているのに」言いたいことを言えばいいのに、言いたいことも言わないで遠慮しています。あとで廊下へ出てから、ぶつくさ言ったり、あんな難しい言葉じゃだめよねなんて言ったりする。それから地域の人から見ると、もしかして、「せっかく私達が一生懸命やっているのに、余計なことを言わないでよ」「あの先生いい顔していなかったわ」

さっき三瓶さん言ったように、教育にとってはずぶの素人なので、その辺のところを一つしっかりしないと、目的としている子どもを育てるところが抜けちゃうんです。大人のしがらみのために大人が犠牲になっちゃうことがあると思います。

私、6月15日に東六小へ行った時に、終わった時に言いました。ビデオさっき二つ見て教師だったら気がついたかもしれませんが、東六小の6月にやったキャリア教育の授業は、おばあちゃんの職業も、お母さんの職業も、ひいばあちゃんの職業も、おじいちゃんの職業も、ひいじいちゃんの職業も、お父さんの職業も、同じ紙に書いてるんです。男の職業と女の職業、ひいば

あちゃんとお母さんの違いと言ったって、色が同じだとどこがひいばあちゃんなんだ？時代とともに職業がどう変わってきたんだ？なんて見えないんですよ。ところが先生だったら、こちらは女の仕事だから薄いピンクに書いてもらおう、こちらは男の仕事だからブルーで書いてもらおうとすると、ひいばあちゃんの時代は少ない仕事だったのに、おばあちゃんになり、お母さんになり、そして私の時代にはと、どんどん女性の職業進出とかって言うんで、私はもっといろんな仕事があるわ。あら、この仕事は昔は男の職業だったのに、今は女でもやれるようになったんだわとかと言う、そういう事なんか一目瞭然になるんだけど、東六番町でやったときは地域の人がやっている授業に先生方が口出ししていないために、そういうことが一目瞭然でないんですね。

さっき、黒松小の授業で、この二人は本校の6年の教員なんですと言ったときには、チョークの色が3色使って矢印太かったり、そういった教育のプロ、子どもの動きがわかる教師。その力量があるのに関わらず、つまらない遠慮でもって言わなかったりする。これは犠牲になるのは子どもだろうと思います。だからそこら辺を、子どもを真ん中に据えた時に、どういう教育をしていったらいいのかなあと、何でも言い合えるようにしていく事は、一つ大事だろうなと思います。自分づくり教育というのは、今まではどちらかと言うと、学社融合って言っても、先生が考えてそれを協力する。そして都合のいいときだけ「ご協力お願いします。」と言われ、担任が変わったり校長が変わったりすると、「今年は結構です。」なんて、体よく使われてた。

どちらかという地域側からアプローチできる教育だと思いますので、自分づくり教育の本質というものがぶれないようにして、是非これを、本当に素晴らしい教育になって行くだらうと思いますので、いい物にしていったら良いのじゃないかと思います。例えばという話で、こんな話でよかったのかな？

野澤令照 ありがとうございます。

実は今いろいろ話を進めてくる中で、なかなか見えなかった部分が見えてきているのかな、特に一緒に関わった本木さんなんかはその辺のところは感じているのではないかなと思うのですが、与えられたものをそのままやらなきゃいけないなんてことは決して無いんだ、教育というのは皆でつくっていくものだという、その辺のところは今の宮崎さんの話の中にあっただけではないかと思うんです。

じゃあ一緒にやっていくことの価値、そんなもの無いのかと言うことになるんですけど、すでに一番最初の本木さんの言葉、それから今野先生の言葉の中にあるんですよ。振り返ってみますと、自分達の力だけでは、このようなフリーターの人達を直接連れてくるなんて発想は生まれなかったとか。それから大きな視野を与えてもらったという言葉があると思います。

これこそが抜かしてはならないポイントじゃないかなと思うんですけど、本木さんその辺で付け加えることあれば、ちょっとお話しただけですか。

本木り糸 私達が今まで子どもとのかかわりの中で、生き方ということを考えてきた時に、修学旅行でいろいろ学んできて、子どもたちの「山形の人達ってすごく地元のことを考えて、とっても温かいんだよね。」という一言を聞いたときに、どうしたらそういう温かみを今度は自分達の身近で感じさせる事ができるだろうか。その温かみを感じさせることができれば自分達もそういうふうに関わりに対して、地域に対して、社会に対して貢献できる子どもになっていくんじゃないかと、そういう期待がありましたので、それはみんなですごくお話をしたところでした。

提示していただいたキャリア教育のプログラムの中に、地域の仕事を知らうという部分が、第4回から第7回の時間の中にあるんですね。そのコンセプトを聞いてみますと、「地元の人と触れ合って、地元の人に声をかけてもらう」と言う事がとっても大事なんだよ。」ということ針生さんから教えていただき、ああ、私達もやってみようね。

でも、申し訳ないけど地元の人に受け入れてもらえるのかどうなのか。百三十何人という子ども達を全部自分達が行きたいと思っている所に上手く配置して、一つのお店に10人も15人も行って上手く行くんだらうかというのが、すごく不安としてありました。

ですから、なんとか針生さんから教えて頂いたような事を、うまく黒松小学校的に何とかならないのかなってというような事を考えたときに、黒松小学校の6年生の子ども達にとっては、もっと身近な親御さんとかの職業を知って、そこから地元に関わりを工夫するというのを、黒松小的にはやるべきじゃないかという発想が生まれてきました。そこで、「じゃあ地元地元というけど誰に頼めばいいのよ？」という事になりました。

子ども達は一応自分の親御さんや身近な人の職業を調べて、それを発表して、そしてその事をもっともっと皆に知らせたいという事で、大きな発表にするためのプロジェクトを今やっているんですね。そこは針生さんが提示していただいたものを改良してという形でやっているんですが、それをすると、今途中の段階なんですけど、子ども達がすごく自分の中で親に対する、あるいは身近な人に対する考えが変わってきている。いつもは家でごろごろしているお父さんだけ、職場を覗いてみたらすごくカッコ良かった。いつもは私達のこと怒ってばかりいるお母さんが、実はパートのほうに行ってみたらすごく忙しく働いていて、笑顔でやっていて、職場では楽しそうだった。仕事ってすごいんだなという事を、本当に言うんですね。

そういう事から、仕事にはお金だけでなく情熱というものがあって、その情熱というものが社会全体に向けられるようにするために、どうしたらいいかという事を考えた時に、針生さんのビデオでは、企業の方をお願いして話をさせていただくという方法でしたよね。

それで、私達は子どもたちに身近な人ということで、校長先生をお願いして、仕事プラスアルファの部分で活動しているところをお話してもらっています。今地域の事を考えていらっしゃる融合ボランティアの方も、それから校長先生の仕事プラスアルファの部分も、商店街の方がいるいるやって下さっている部分も、お金には換えられない部分、社会に貢献するための部分がたくさんある。その部分をぜひ子ども達に教えて頂くという事をできたらいいかなと思ったのです。そういう部分をこれからうちの学校がだんだん引き継いでいくために、毎年毎年同じ様な事をするんでなくて、もっと地域とのつながりを得るために、そういう社会から達人を呼んだりする、いろいろお話を聞かせてもらえるところとのつながりを、私達と直接つながるだけでなく、たとえば針生さんとか、地域の方々に言うとかいう人を連れてくれるみたいな、そういうのがあったらいいなあなんていうふうに、私達は思っています。私達が直接言うのに、誰をどういふふうに連れてきていいかわからないというところが、まだまだあります。そういう機関が仙台のわくわくプロジェクトというのにあるというのも良く分っているんですけども、実際に見てないので良くわからない。口コミ情報としてはどうなのかなというのも私達は知りたいところなんで、そこと直接繋がっていくような事が、どこかでできたらいいかなあと思っています。ちょっと難しい話なんです。

野澤令照 そろそろ時間が近づいてきているんですけども、この会場にいらっしゃっている方々は、放課後あるいは休みの日に子ども達と一緒に活動をしているという子ども教室の関係者の方々、仙台市内からは校長先生方や現場の先生方、そして黒松小地元の PTA の方々、多くの方々がいらっしゃるんですが、共通して言えることは、目の前にいる自分達の大切な子ども達を何とかしたいという思いを持っている人達が集まっているということだと思います。そうしますと今、本木先生のお話にもありましたが、いろんな思いを伝え実現していくために皆取り組んでいるわけですけども、それぞれの立場で、それぞれが考えられることをやっていく事が、非常に大事なことだろうと思えます。先ほど宮崎さんがおっしゃったように、たった1時間や2時間のパネルで結論が出るものではございません。でも、今日の話し合いの中でいろいろ見えてきているところはあったのかなあと思えます。その辺のところを踏まえて、パネラーの方々に、短い時間で恐縮ですが、今後につなげるという意味も込めて、お話をいただければと思います。トップバッターは本校きっての若手教員、木村圭さんから、先ず一言お願いします。

木村圭 たぶんここで私が一番経験が浅いんじゃないかなあと思って聞いていたんですが、私がやれることを考えてみました。先ず第一に子ども達のためにできる事というのを探して、それをやるために自分の職場、私は教員なので自分の持っている力、あとは皆さんから貸していただける力、役割分担をしっかりと、遠慮なく、さっき菊地さんがおっしゃっていたように、遠慮なくお話をしながら、子ども達のために頑張っていくと、今日改めて思いました。

野澤令照 ありがとうございます。本木さんはいいですか？

本木り糸 今長々と話したんばかりなんですけども、いろいろなプログラムを利用するというのももっともっと目を向けるということ。それに対して私達は臆病になってはいけないのかなあと思っているところです。子どもが変わっていく姿を思い描くときに、どうしても、こうでなければいけない、ああでなければいけないという事があるんですけども、私達のその視野の狭さが、世の中の難しいことを解決できにくくしているんじゃないかなあと思うときもあるんです。ですから、いろいろ視野を与えてもらっている社会の方に私達も目を向けて、いろいろな経験を

積んで取り入れていくって言うことは、私達には必要なのかなと思っているところです。

野澤令照 じゃあ菊地さんお願いします。

菊地淳 私は、今後これがどんどん発展して深まっていくためにとても大事な事って言うのは、共通の言語を持つことだと思うんですよ。

我々が学校の皆さんと話するとき、わからない言葉がたくさんあるんですよ。たとえば目当てとか手段とか言われても、最初ぴんと来ないんですね。ずいぶん昔こんなこと言われたなあというのはあるんです。だけど企業の中で使わない。たとえば、自校化、プログラムを自校化するという言い方ありますよね。それは全然想像できなかった。かなりコンピューターで探したんですけど、これ何なんだろう、どういう漢字を当てはめたら良いんだろう？で、戻ってからいろいろ調べてみますと、自分の学校に合うようにつくっていく。まさに今日話しているような話だとも思うんですけど、ああ、そういうやり方をするんだなと、そこで初めて分ったりするんです。

その違い、逆も当然あると思うんですけど、企業、我々業界の言葉を翻訳して先生達にご理解いただくということも必要だと思うんですけど、そういう所、うまくできる方法を考えなければなと思っています。

もう一つは、当て字なんですけど、よく「^{ひろ}拓く学校」、開拓の拓を使っている学校ありますよね。それが学校自体を開放する、子どもの能力を拓くということでは言われているんですが、最近私が思っているのは、地域の必要とされる人材を開拓するために開く学校というの、あっていいのかなと。ただし、それは学校の中に呼び込むというよりは、外へ出て行かないと、なかなかそういう人達ってのは見つからないんじゃないかなと思うんですよ。そのために社会教育施設、仙台では市民センターとかの持つ役割というのは、ものすごく大事なのかなあと思っています。そこで、どう支援者を集めて行くかみたいな事って言うのが、これから考えていかなければならないことなんですけど、それで出来てくる事というのが地域コミュニティというものの再構築。キャリア教育とか自分づくり教育というのが、そのための道具として使われていくというのがとても大事なことだと思います。そのためには、我々大人が変わんなきゃいけないんだなと。子どものことを問う前に大人はこうあるうということも大事だと思いますし、子どもにいろんな喜びを与えるための学習の場を、それをつくっていければなあと思いました。

野澤令照 ありがとうございます。三瓶さんよろしく。

三瓶綾子 ちょっと先ほど我々素人が学校に関わる時に本業で無いという話をしていたんですけども、動機はいろいろあると思うんです。企業にとったら、こういうこと言うと抵抗あるかもしれないんですけども、自分の会社の社会貢献していくって意味で学校に関わるっていうの、もちろんあるでしょうし、または、功成り名遂げた方にとっては次の世代を育成しなければいけないとか、いろんな動機はあると思うんですけども、次世代の人材を育成することに動機はいろいろあっていいと思うんですけど、やる気というかモチベーションは揃えていきたいなあというふうに思ってます。それは、先ほど言ってきたみたいに国の施策も変わっていきますし、予算どりとかがいろんな変わっていくんですけども、それはもう、「動機です」「使える手段です」というふうに割り切っていただいて、地域の方でそれを受ける「やる気」、「モチベーション」を揃えて待っていただければなあと思います。それからこれを行っている現役の社会人、ちょっとさっきの本業でない話も絡むんですけども、先生も含めて、現役の社会人も含めて、忙しいんですね。忙しいので他の所に意識が行かないというのは、我々の自戒を込めて言っておかなければいけない事で、先生方も忙しいでしょうが、みんなで荷物持ちますよというのに、先生方もちょっと周りを見渡していただければなあと言う風に期待をします。

野澤令照 ありがとうございます。じゃあ会長、最後に。

宮崎稔 仙台はうらやましいなあというのが実感です。針生さんとか、こういった人達がバックにいてくれる。教育委員会の方達は、ぜひ頑張れよっていうふうにかうやって応援して下さっている。ビデオで見ると指導力のある先生がいて、多分ああいう先生がいるということは、あの10倍は普通いるので、力量や意欲のある先生がいる。これは野澤先生、成果挙げなければ先生の能力が問われてしまうかもしれませぬよね。

私が自分づくり教育して来ながら、さっきまでもやもやして一つだけ引っ掛かってきたこと

があるんですけども。教育は人づくりと言われるんですけども、私達は本当に人をつくってきたのかな？なんか算数ができる子どもをつくってきた。で、本当は自信を無くす子どもをつくってきたんじゃないかな？

生きる自信をどういうふうにつくってきたんだろうか？生きる自信。生きていきたい自分、夢を持ちたくなるような自分。そういった子ども達をどうやってつくったらいいんだろうか？それに向いている自分づくりということ、どれだけ語られたんだろうかなあ？ということを感じたんです。一つ引っ掛かっているのは、学社融合をずっとやってきながら、実は、まじめじゃない、変なおじさんの役割っていうのをすごく貴重なんだろうなと思うのです。こういう、針生コミュニケーションズが出てきて、「皆さん自分づくりですよ、キャリアですよ」という事以外にですよ。家でもってぐうたらな姿を見せしている親父が、実は職場ではすごかったと言う。そのぐうたらな部分を見せていける、あるいは酔っ払った部分を見せている、そういう、地域にはいろんな人がいる。だけどその人は通知表を付けなくて「お前そこんとこいいじゃないか」、「お前もなかなか器用じゃないか」。事実を事実としてありのままを見てあげる、で、大いにほめてくれる。自分くささを出している先生っぽくない大人。だけど何か名人芸を一本持っている大人っていいじゃない。「いっぱい駄目な事あるけど、あのおじさん、ああいうところかっこいい。」そういった姿を見せていくことが、自分づくりの、実は土台になっているんじゃないだろうか。地域の人が学校に入って来る。建て前以上に大切なのは、そういう丸ごとの生き様を見せていくということが、案外大事なんじゃないだろうか。

今、子ども達は建て前の洪水の中で溺れちゃって、学校でも家でも廊下歩く時でも、何かきちんといい子で無きゃならないようになっていて。だけど、自分を豊かにするって言うときの安心感みたいなもの。「あのおじさん、あんなすごいけども、子どものころ、こんな失敗して先生に叱られたんだってさあ。」っていう事を言ってくれるおじさんあたりが地域にいてくれる。そういった安心感がある、それがスタートだと。

安心感が無いときには、自分を豊かにするって言うところになかなか目がいかないんじゃないかなっていう気がするんです。だから、自分を作りたくなるための土台づくり、自分づくりのための土台づくり教育っていうか、そのためには、「このおじさんと触れ合ってみたいな。」、「このおじさん名人なんだけども、すごく付き合いやすいんだよ、聞きやすいんだよ。」そういった、人と関わっていきたくなる第一歩は安心感なので、建て前できちんとした人ばかりが学校に来るんじゃなくて、何か安心して、このおじさんには語れるんだっていう、そういう人が地域にはいっぱいいるよっていう、その辺が、「僕もいつもだめだ駄目だと言われるけども、なんか、駄目だけどもがんばってみたいな」みたいな、その辺もすごく貴重なような気がするんですね。だから、プログラムができてきちんとした自分づくり教育もいいんだけど、単発のようなもの、一過性のようなものであっても、数多く、しかもできるだけ身近な人も子ども達のそばに呼ぶって言うことが、すごく貴重なような気がするんです。

ということは、自分づくり教育は6年生から始めるんでは遅いのかな。もっともっと単発の部分、名人の話を聞いたり、名人の子ども時代の失敗談を聞いたり。そういうことを、3時間か4時間ぐらい、3、4年生ぐらいから少しずつ始めていきながら、でも、その名人になる時に努力したところを、自分もそういう名人になっていきたいという事を少しずつ積み上げていく。そういうプログラム、全体計画を作っていくことが必要なのかなということを感じました。以上です。

野澤令照 ありがとうございます。5人のパネラーの方々から様々なお話をいただきました。会場からは学年の先生、そして指導課の課長様にもお話をいただきました。もっともっと会場の皆様からご意見をいただければというふうに思いましたが、時間が無いところをお許しを願いたいというふうに思いますが、実は今日テーマとして取り上げて話をさせていただいた中で、私自身も胸に残ること、心に残ること、いくつかございました。

実はこのプログラム取り組んでみたのですけれど、なかなかじっくり来ないという産みの苦しみがありました。でも、そこの中にはやっぱり教師が持つ希い、それに対して開発をしてくださった皆さんの希い。それをすり合わせるための時間が、実はかかった。だからこそ多くの時間が必要になったということだと思んですが、でも、それを何とか一所懸命やれたというのは、実は学校の事情を考えて、学校の中で生かしやすいという、そういう提案をしてくれたというプログ

ラムの質の高さ、さらには、そういうふうなものを受け止めて、ただ自分達が受け止めただけでやろうとしない、自分達の思い、子どもに対する思いを持った教師達の良識。それが一つに合わさったことで、冒頭に申し上げたような子どもの感想が生まれるような取り組みができたのかなというふうなことを感じております。

実はそのところが先ほど本木さんも言うておりましたけど、もっともっと多くの社会の多くの立場の方々と一緒に力をあわせて取り組むことで、より質の高いものができるんだなあというふうな事が、今回の中で見えてきたなというふうな事を、一つ感じました。

二つ目には、実はこの教育は素晴らしいんだと、キャリア教育は素晴らしいんだということを中心に押し出されたとしたら、学校現場はおそらく受け止められなかったと思います。一緒につくろうという意識があるからこそ現場の中に根付き始めたということが言えると思います。

そしてその中の大事なポイントは、先ほど宮崎さんがおっしゃいましたが、これまで大人たちが教育の中で子どもに求めてきたもの、身につけようとして思ってきたもの。つまり、人間としての本当の力、心。それを養うというところにぴったり一致したものがあったからこそ、こういう展開になりうる可能性が見える、そんなことを話し合いの中から感じました。

もう一つ、時間の無いところ恐縮ですが、先ほど宮崎さんが「普通のおじさん、普通のおばさんが、たくさん実は子どもの周りにいるんだよ、地域にいるんだよ。そういう人達が学校にいることが、うんと大事なんだよ。」というお話をしてくれました。なぜかって考えると、子どもはいろんな能力を持っています、でも学校という限られた場の中では、全員が認められるとは限らない。でも、そこに多くの立場の、多くの考えを持った人たちがいれば、その中で認めてくれる人が増えてくる。認められる子どもが一人ずつ増えてくる。そこが実は大きな大きなポイントなのかなあというふうに思うところです。

実はここにいらっしゃる方は、地域で子どもを支えていただいている方、非常に多いということをお話しましたが、まさしく皆さんが日ごろなさって頂いている事が、子どもを、未来を担う子ども達をしっかりと育てるために、実は無くてはならないことなんだと感じました。是非、大いに学校も、地域の方々、お父さんお母さん達と一緒に力をあわせて取り組むこと、学校の中にたくさんいろんな方に入っていただくこと。そういうことを心がけていくことが必要だと思いますし、どうぞ皆さんも「私達には関係が無い」とか、「入ることはできない」と思わないで、どんどんどんどん入っていただければと感じたわけです。

時間が過ぎて恐縮でございます。パネラーの皆さんのおかげで、本音のところまで出していただけたのかなと感じている次第でございます。ご協力いただいたパネラーの皆様方に、感謝の拍手を送りたいと思います。本日はどうもありがとうございます。

それからもう一つだけ、先ほども誰かご紹介いただきました、今日は土曜日でございます。学校は休みなんです。ところがたくさん先生方がここにおります。ちょっと変な校長が来たおかげで、休みに出て来なければならなかったという先生もいるんじゃないかと思うんですが、昨日は夜八時過ぎまで準備をしてくれた先生方がいます。コーディネーターの独断でございますが、協力をしてくれた先生方にも、暖かい拍手をお願いします。

では以上でパネルディスカッションを終わらせていただきます。進行にお返しします。よろしくをお願いします。

山崎賢治 皆さんの率直な意見交換をお聞きできる、大変素晴らしいパネルディスカッション、ありがとうございました。あ、菊地さん一言どうぞ。

菊地淳 業務命令がございまして。先ほどビデオのほう、ご紹介しましたが、そのときの去年の東六小学校の方でやった授業の、自分づくり教育研究部、5年生6年生の担任の先生の皆さんがまとめられた「自分づくり教育」の報告書があるんですね。東六小学校の校長先生のご了解をいただきまして、実費でお分けして良いという話で、受付にございますので、貴重な資料なので、よろしかったら、勉強になると思います。

山崎賢治 そういうことで、今一度パネリスト、あるいはコーディネーターの野澤先生に感謝の拍手をしたいと思います。ありがとうございます。また、このパネルディスカッションの模様を全部ファシグラとしてまとめていただいたお二方にもどうぞ拍手をお願いします。ということで、パネルディスカッションを終わらせていただきます。ありがとうございました。

(2006.10.14.学社融合 キャリア教育報告-5.wav 完)

3 平成19年度以降の「子ども教室」への動き

10月15日(日)に仙台市で行われた「ゆうごう子ども教室全国研修会」は、35の実施教室からの掲示物での発表と、代表して5つの教室からの事例発表がありました。どの教室もそれぞれに課題を抱えながらでありましたが、それらを克服して大きな成果を挙げていました。

また、庄子平弥運営協議会長からは、特に今後のあり方について熱のこもった提言がありました。特に、来年度以降の方向については、融合研としても明確な対応をする必要がありますので、以下に記載します。

3年間の予定で実施された文部科学省の「地域こども教室事業」が当初の予定通り、本年度で終了となります。そのために、「ゆうごう子ども教室運営協議会」としても、今後の対応について考えなければなりません。

文部科学省では、厚生労働省と一体で「放課後子どもプラン」という政策を提案して、19年度以降からの予算化を試みています。これまでの「地域子ども教室」と、19年度からの「放課後子どもプラン」とは、下記のように特に予算措置については大きく違っていますので(以下、《1》に概要を記載)、融合研としてどのように対応するかを役員会で検討して結論を出すことにしています。

元々、18年度で終了することは分かっていたので、各教室ではそれ以降についても視野に入れながら運営していたことと思いますが、現在までの役員会での話し合いの経過についても(以下、《2》に記載)述べたいと思います。

《1》「地域子ども教室」と、「放課後子どもプラン」との違い(概要)

	地域子ども教室	放課後子どもプラン
事業主体	文部科学省	文部科学省と厚生労働省
予算の種別	事業委託(全額文部科学省予算)	国・都道府県・市町村が1/3ずつ負担する補助事業
実施の対象	全都道府県と民間組織	自治体のみ
実施の場所	制約無し、会場使用料も可	全ての小学校(約20000カ所)

このことによる問題点は、

これまでのような委託事業ですと、活動に伴う経費の全額が国から出ていましたから、どの自治体でも、また民間組織でも運営が可能でしたが、子どもプランでは補助事業という性格上、自治体(市町村)が実施を決定した場合のみ県・国が1/3ずつを補助するということ(政令指定都市の場合は、2/3を市が補助することになります。)。厳しい財政状況の中、たとえ1/3であっても、新規事業に予算を回せる自治体がどれだけあるかが懸念されることです。また、そうなると富裕な自治体の子ども達とそうでない自治体の子ども達では恩恵に差が出るということも考えられます。

また、ゆうごう子ども教室のような民間組織は対象外となります。運営をする場合には、自治体の傘下に入り、自治体の承認のもとに実施することになります(窓口は、例えば自治体の教育委員会 課のみということになります。)

さらに中学校は対象外となっています。ゆうごう子ども教室では、中学校を実質的な実施会場にして運営されていた教室がありますが、19年度では会場としては対象外になります。中学生が活動することまでは排除されていませんが、実質的な活動が制約されることが考えられます。

《2》現在までの役員会での話し合い経過(概要)

融合研では、10月15日に仙台市での「ゆうごう子ども教室全国研修会」が終了後、役員会を開催して、今後の対応について協議しました。その結果、

「放課後子どもプラン」については19年度以降の事業なので、その対応を決定するのは、融合研本体の役員会が行うこと。

その役員会には、18年度までの「ゆうごう子ども教室運営協議会」の役員も同席すること。当面は、ゆうごう子ども教室を実施している各自治体の長（市町村長）に、19年度予算に盛り込み「放課後子どもプラン」を実施するよう早急に要望書を提出すること。

が、決定しました。今後の動きにつきましても、逐次ご報告致したいと思います。

また、仮に所属する自治体が放課後子どもプランの実施を見合わせるようなことになりましても、「ゆうごう子ども教室」を実施した教室では、これにひるむことなく2年間の活動で得た子どもや大人の居場所づくりを通じた地域づくりの手法が、様々な場面で開花・活用されることを願っております。

4 「資料集 第3集」を送付しました

（事務局が会員に送付したメールを転記します。）

融合研の会員みなさまへ（2006.10.30）

融合研事務局長の宮崎雅子です。

融合研のプログラム開発委員に「内容解説」の執筆いただいた、『学社融合資料集 第3集』が完成しました。会員の皆様には今週中にはお手元に届くと思います。東京大会にご参加出来なかった方には「年報」も同封しました。会員の皆様の実践の参考のためご活用頂けたらと思います。

会員更新お手続き（年会費納入も）が終了しているのに届かない方がいらっしゃいましたら、融合研の事務局 miyazaki@jb3.so-net.ne.jpまでご連絡頂きたいと思います。よろしく御願います。

5 役員承認（プログラム研究開発委員会）

10月14日の仙台フォーラムで、プログラム研究開発委員長が正式に決定しました。これは、8月の「融合フォーラム in 東京」の折に、岸裕司さんをプログラム研究開発委員長代理として承認したあと、委員会の実質的な活動である「資料集 第3集」が完成されたのを機に、岸からの提案で同委員会の委員（37名）に諮って互選したものです。なお、仙台に参加できなかった委員には、事前にメールで確認をとっていたこと、また規約上、各委員会の委員長は委員の互選によるものとするという規定があることを申し添えます。

委員長 永谷貴弘（会員NO. 87；大学講師）

副委員長 中川洋太（会員NO. 176；厚木市教育委員会）

副委員長 岸裕司（会員NO. 2；秋津コミュニティ、副会長兼務）

プログラム研究開発委員会では、資料集が第3集で完結したのを受けて、今後はプログラムの研究開発と同時に、「融合研設立10周年記念事業」のひとつであります「記念誌の発行」にも携わっていただきます。

6 10周年記念フォーラムについて

融合研は、来年（2007年8月）が設立して満10年になります。そこで、これからの1年間を「融合研設立10周年を記念する年」と位置づけて、一層活発な活動を繰り広げたいと考えて、各地でのイベント等にも「融合研設立10周年記念」という冠をつけて実施していただくようにしました。

岸副会長の「巻頭言」にもありますように、今後、会員の皆様でフォーラムや勉強会等の予定がございましたら、是非、この冠をつけて実施されるようご検討をお願いします。また、予定が無かった地域でも、この機会に冠を付けて勉強会等を実施されることも是非ご検討下さい。

《編集後記》

「もっと早く」と思いながら、33号の発行が遅くなってしまいました。今号は、東京フォーラムと仙台での東北フォーラムがあったので、記録を担当していただいた方は大変だったことと思います。また、できるだけ詳細に報告したいという考えから、文字ばかりの会報になってしまったために読むのが大変だと思いましたが、記録の人のご苦勞に報いるためにも、是非じっくりとお読みいただきたいと思ひます。(M)